
エンダ

日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンダ

【Nコード】

N8274X

【作者名】

日葵

【あらすじ】

眼下に広がる異質な世界。

こんな世界にたった一人で、一体何ができるというの？

こんな場所で倒れるわけにはいかない。私は・・・

(注) 残酷な描写は無い予定ですが、一応設定しました。

別サイトで同作品を掲載しております。現在8章まで掲載中です

(只今改訂中です)

第1章 Usual spot - 1

二年程前から、自分の存在価値について考え込むようになった。もつと言え、全てが虚しい。生きる価値を見出せない自分に気づく。

一番の原因・・・それは分かっている。三年前、突然襲った母の死。それからだ、全てが虚しくなったのは。亡き愛する人を思い出すのは辛い・・・それなのにふとした瞬間に母の事を思い出してしまう。

自宅のマンションで、缶ビールの蓋を開けた。アルコールの匂いが鼻に付くが、グイッと飲み干す。酒は強いほうだが、癖になると困るので飲むのは週二回と決めている。

『そんなルールを作っている時点で、もう駄目だっというか・・・』

□

深い溜息を掻き消す様に、テレビからは延々と、騒々しい音が流れてくる。芸人が放つ言葉に、会場がワツと盛り上がっていた。一体何がそんなに楽しいのだろうか・・・眉間に皺を寄せながら、チャンネルを変えるが、どこも同じような番組だ。特に意識して見ている訳ではないが、テレビの音に感情が紛れる。こんな割り当てられた空間に一人で居ると、無性に堪らなく漠然とした不安が襲う。深く考えすぎると口クな事がない・・・そう考えて、無意識にテレビを付ける。そうやって何年も何回も過ごしてきた。

『前は・・・良かったな・・・』

声に成らない言葉をグツと呑み込む。数年前は、家に帰れば母が居た。特に会話が無くても、得られたあの安心感や安らぎは、何物にも換え難い。

「一人になつて気づいても・・・なあ」

私の母は本当に苦勞人だった。働かない父親のせいで幼少の頃は、一日中働いている記憶しかない。貧しい幼少時代だったが、母の愛

に包まれて育った私は、父の事だけが悩みの種で済んでいた。

母の記憶は、私の胸をこんなにも苦しくする。飲んでは暴力を振るう父親から、いつも守ってくれた母。無償の愛・・・母から受けたこの愛で、私はこの世界で生きる事が出来たのだ。父親が病気で亡くなって、ようやくと親子二人で心穏やかに暮らす日々に、

「いよいよこれから、お母さんの人生だよ。やりたい事やりなよね」

そう言葉にする私に、

「今までも自分の為に生きてきたわよ」

そつと笑う人だった。もつと伝えたい事は沢山あったのに、三年前だ・・・あの日会社に掛かってきた電話によって、全てが一瞬で消え失せた。

【道に飛び出した子供を助けようとして・・・】

電話の声が耳に入らず、緊迫した声も遠くで聞こえた様な気がした。

はぁ・・・もう三年も経つのに、一体いつになったら、母の事を暖かい気持ちで思い出せるのだろうか。昨日まで話していた声が聞けなくなつて、大切な人が突然居なくなつて・・・寂しい。虚しくて堪らないのだ。私はこれから、寂しく長い人生を送しかない、そう思わずにはいられない。

今までは、どんなに居た堪れない気持ちに陥つても、帰れば母がいた。そこには、私が帰る場所が確かにあった。それが当たり前だったあの頃。一人じゃなかった、あの頃。母の死後、私はこの都会でたった一人だ。生きて行くだけの人生を送っている。大げさと思われるかもしれないが、心の虚無感が私を負の感情へ押し流す。

それからの私は、

「孤独」

この言葉に、都度苛まれるようになった。

勿論今の状況は、母の事だけが原因ではない。仕事、友人、恋

愛、結婚の事、全てにおいた将来の自分。女三十代。結婚の予定も無い。あるとすれば、社歴だけが長くなる仕事だけだ。

生きていく以上は、どのような立場であろうと働かなければならない。それが社会だ、というか現実だ。実際、私の仕事は忙しいほうだと思う。毎日、毎年同じだ。数字の積み上げを行い、期限通りに仕事を上げなければならない。経理事務員として毎日二十一時位の帰宅時間となる。遅くも無いが早くも無く、そこから自分の為に何が出来るのだろうか？ そんな余力があるのなら、明日の仕事の為に取っておきたい位だ。

一体誰の為に、何のために走り続けているのか？ 誰かに教えてほしい。私がどこに向かっているのか。・・・馬鹿な自分、そう思い自嘲気味に笑った。全ては自分が選択してきたくせに、と。

二本目の缶を開けて、ぼんやりと窓を見た。カーテンの隙間からは、暗い闇が見える。こんな空の下には、私みたいな人間はごまんといる筈だ。こうやって先の不安に押しつぶされそうな夜を過ごし、孤独を感じ必死に足掻く人間など腐る程居る筈なのに。何故這いあがれないのだろう・・・そして私は、何だ、何なんだ。そう自問しながら、今日も眠るのだ。

第1章 Usual spot - 1 (後書き)

第1章 Usual spotは主に主人公の女性の心の葛藤を書かせて頂きました。

少し重たい章になっておりますが、ここからストーリーが繋がっていくのかと思うと、今からドキドキしています。それでは、楽しんで頂けるように日々精進致します。宜しくお願い致します。

第1章 Usual spot - 2

「今でなくてはいけませんか？」

私は声のトーンを落とし、眼前の上司を挑発しないように静かに問うた。しかしそんな気遣いは全て無駄に終わり、耳障りな声が響く。オフィスが広いせいもあり、声は全体に響き渡っている。その状況に、内心深い溜息を吐いた。

「当然だろう！！ 人を育てるのに、時期なんて関係ないと思うが？ 優秀な！ 優秀な人材にチャンスを与えるのは、会社の義務だ！！」

入社して数カ月ばかりの新人に、大きなプロジェクトを任せようという話だ。必要以上の怒涛に、思わず皆が振り返る。その視線を背中に感じながら、更に声のトーンを落としながら、

「はい。しかしプレッシャーで入社出来なくなった社員も多数出ておりますし、出来れば後数カ月お待ち頂けたら、業務の内容も理解出来てよいと思いますが・・・。」

そこまで広くないフロアの中で、眼前の上司はテンションを上げるかの様に更に声を張り上げた。怒涛に近い罵声に、ある者は苦笑いをし、ある者は溜息交じりに外に出て、ある者は面白おかしく傍観している。

「はあ？ 君に聞いているのは、ただの確認なんだがねえ。彼らが持つっている仕事を君が出来るかどうかをだ」

興奮している上司の声は、フロア全体に響き渡り、背中に感じる周囲の雰囲気は最悪だった。誰もが息を殺し、事の成り行きを見守っている。そんな皆の息遣いが聞こえてきそうで、嫌気がさす。会社がどう私を判断しているのか？ そんな事を、こんな場面で何故曝け出されなければならないのか。

『だったら初めからそう問えばいいのに・・・』

「私に、彼らの仕事を担当すると・・・というお話でしょうか？」

慣れている。こんなことは。今まで何度繰り返されてきたのだから。部内で新人の仕事だと認識されている仕事であつても……だ。本来ならば黙つて受けるべきだろう。

『でも、一体いつまで??』

そんな心の葛藤を、見透かしたように口元を緩めながら、上司は言葉が続けた。

「そうだ。この部署に暇なのは君だけだろう?」

何がそんなに嬉しいのだろう……緩む口元を手で隠しながら、舐めるような眼で見上げてくる。

もつと業務的に伝えてくれたら、こんなに心が揺らされる事もないのに。上司はおもむろにデスクから、耳かきを取り出し、耳の穴を掃除し始めた。もうこれ以上話す気も無いのだろう。更に左手でパソコンのキーボード打ち付けている。

「……そうですか。……今担当している業務の事もありますし。少しお時間を頂いても宜しいでしょうか?」

そう、伝えるだけで精いっぱいだった。パチーン、パチーンと弾くキーボードの音がイヤに耳に付く。恐らく今起きた状況を誰かに報告するのだろう。この上司は、そうやって自分の地位を確立してきた。社内では有名な話で、一人をターゲット絞り、徹底的に追い込む。その対象は必ず女性社員で、女性社員の離職率を上げたい会社の思惑だという声も噂される位だった。

席に戻った私は、パソコンを目の前にして、ゆっくりと息を吐いた。数年前から檜玉にあがった私は、それでも会社に残まっている。四十近い女の転職がどれ程悲惨か分かっているつもりだ。それに……と呟く。

『私の誇りなんだ。今の仕事は』

そう何度も心の中で呟いて、伝票に手を掛けた。

第1章 Usual spot - 3

「はぁ・・・」

その日の夜、行きつけのBARで、止まらない溜息に友人を付き合わせていた。同じ会社で働く女性、沙織だ。営業の前線で戦っている沙織は強くて明るく、会社で一目置かれている存在だった。経理に所属しているとはいえ、全てがシステム化されている現在では、営業の彼女とは接点が無い。しかしプレゼン資料の経費の件で私は、
「ねえ、一度飲みに行かない？」

そう声を掛けられた。端正な顔立ちの沙織から、嬉しそうにジッと見つめられた私は、不毛にもドキドキした位だ。

「え？」

事務的に業務を伝えていた時に受けた突然の誘いに、正直面喰った。会社の女性社員達は、プライベートを重視する傾向がある。企画された飲み会にこそ参加するが、プライベートで飲みに行くなんて、ここ数年無かった事だ。しかし誘いに乗ってみると、評判通りの女性だった。常に前向きでサバサバしていて・・・いつの日か心を許せる唯一の友人になっていた。上司から不当な扱いを受けた日は、どこからか聞き付け、「飲もうよ！」と誘ってくれる。それが単純に嬉しい。

「本当にどうしたいのかしらね、女を」

沙織はそう言うと、グラスのウィスキーに口を付けた。コハク色のグラスの中に、アイスボールが光を反射してキラリと光る。彼女のセリフは、何も私だけへの励ましではない。二年前に結婚した彼女は、大きなプロジェクトをあっさりと外された経験を持つ。営業でトップ三の結果を出し続ける、彼女に対する会社の期待は大きかった。女子社員の間では、結婚が過小評価の対象にならないのではないのか？女性蔑視の傾向が強い、会社の転換材料になるのではと、ひ

そかに期待されていた。

しかし会社は、沙織をマネージャーから一般社員に降格させた。会社の言い分はこうだ。

「君には期待していたんだがねえ。結婚した以上、子供が出来る事を想定すると、会社はリスクを負った訳だ。そこを理解してほしいね」

沙織は、ロックグラスをカタリと傾け、

「大体、あの人にそんな権限あるの？ 部長に相談しなよ。絶対私的な意見だつて。毎日仕事もせずにインターネットをしているよ。うな奴よ。真に受けない方が良いつて！ もしあの男の行動が会社の命だったとしても、屈する必要はないからね」

人の陰口を言わない彼女にしては、珍しい発言をする。勿論、私を氣遣う優しさだった。今は沙織の優しさにどっぷりと甘えてしまう。

「会社は私をどうしたいのかな？ 勿論仕事は一生懸命やるよ。お金貰っているし。でもあんな言われ方をしなければいけない程、駄目なの？ 私。もうどうやってても、駄目の様な気がする。」

・・・駄目だなあ、今のは愚痴だね。・・・うん、沙織の言う通り、仕事を頑張っていればいいよね。今の仕事、結構責任があつて遣り甲斐を感じているんだ」

心配そうに顔を向ける沙織にハッと気づき、気を取り直して笑った。私の言葉に、少し安心した表情を浮かべながら、

「全然！！ 聞くつもりで誘ったんだもん。溜め込んだらダメよ！ いっぱい話しな」

そう笑いながら、彼女はゆっくりと言葉を繋いだ。

「でも、ね。多分私、敢えて今のポジションを選択したの。会社の歯車として、頑張る事に限界を感じていたし・・・ね」

そんな選択もあるよと、ヤンワリと言ってくれている。

「そうだね・・・」

自分に聞きたい・・・私は、どうしたいの？ 一生働くことに不安が

ないと言えば嘘になるだろう。でも結婚の予定はないし、繰り返される生活に、劇的な転換期なんて訪れる筈もない。

『だから働いているの？ ううん、そうじゃない。生活の他に大事なものがある』

・・・私の存在価値というのだろうか。しかし、今ではその価値ですら見失いそうになる。昔は母がそんな存在だった。それが幸せだったのに。一体どうしてこんな事になってしまったのだろうか。こんな出口のない、問答を一体いつまで繰り返すのだろうか？

そう思うと気持ちが沈むのだが、沙織に心配かけたくない一心で、沙織の言葉に微笑みを返す。目の前の優しい友は、こんなにも親身に心配してくれる。沙織が居るから、あんな会社でも頑張っているのだ・・・そう思うと、グラスを一気に飲み干した。

「昔はもつと飲めたのに・・・ごめん」

「何言ってるの！ 今日付き合ってくれただけで、助かったよ。本当に楽しかった。スッキリしたしね！！」

旦那さんに宜しく伝えてね」

「ううん、私も一緒に飲みたかったし。また行こうね」

そう言って彼女は、彼女を待つ家族の元へ帰って行くのだ。彼女の後姿を駅で見守りながら、改札に定期を翳した。沢山の人が帰宅を急ぎ、私を何人も追い越して行く。帰宅時の電車の中は、平日の遅い時間だというのに結構混んでいた。ふと窓に映った自分の顔を見ながら思う。

『歳・・・取ったな（疲れ皺が醜く感じて、思わず目を背けた）・・・最近、愚痴っぽくて嫌になる。沙織不快な想いをしていないかな・・・』

この電車みたいに、私の人生の行き着く先が分かっている、こんなに不安に成る事もないのに・・・そんな下らない事を考える自分に嫌悪する。考えてどうするのだ。良い事なんて起こる筈もないのに。

第1章 Usual spot - 4

一人の部屋に帰った私は、おもむろにテレビのチャンネルを入れた。何をする気力も起きない。ソファにしな垂れながら、脱力感にバタリと横になった。テレビからは、自己啓発に勤しむ若者達の特集が組まれている。専門学校を卒業した私は、直ぐに今の会社に就職した。今では大学卒しか取らない会社だが、当時はバブルも後半という事もあり、何とか滑り込む事が出来たのだ。それから、正にコツコツとただひたすらに仕事をしてきた。仲間達が退職していく中で、私はひたすら働いてきた。仕事のスキルを上げる為に、様々な資格も取得した。しかしそれが何になっているのだろう。テレビに映る未来ある姿が忍びなくなり、早々にベッドに横たわった。今ではリストラの対象になりつつあり、上司の嫌味に付き合わされる日々。

『二十年近く・・・何だったんだろう・・・』

こんな夜は何度なく過ごしてきたのに、今日の出来事は私の心を無性にかき乱す。そう・・・こんな夜は困る。この虚無感に結論が出ず、抜け出せないループが辛い。私は深い溜息を吐いた。

・・・寝よう。いつか変わる。変わらなくても、私の考えがいつか変わるだろう。私の世の中に対する矛盾が矛盾でなくなる日が来るから。そう、思いながら目を閉じた。

「やだあ。ホントに無理。暗あーい！」

クスクスと笑う声が、すぐ耳元で聞こえたような気がして、背中がゾクリと冷えた。

『今、何か聞こえなかった？ まさか・・・』

私は一人暮らした。しかもここは、マンションの一室・・・現実的にこの声はあり得ない。思わず息が止まる。

・・・気のせい？ そう思うのに、体がピクリとも動かせない。

少しでも動いてしまったら、何かが終わってしまいそうな気がした。横を向いたまま自分の心臓の高鳴りがやけに耳に付く。一瞬、静寂が広がり、暗闇だけが周辺に広がる。

・・・何も聞こえてこない、あるのは暗闇が故の静寂だけ。最近ネガティブな発想に陥りやすいせいか、幻聴まで聞こえる様になってしまったのだろうか。

「はあ！」

息を止めていた事すら忘れていた。

「大丈夫？ 私」

そんな自分に、思わず一人言を呟いた。そう言えば聞いた事がある。配管などを通して、周辺の部屋の音が響く事があるって。

「ふう」

やっと、呪縛から解き放たれたように、体を捻り天井を見上げた瞬間・・・淡く光る何かが目の前にいた。いや、浮いていたのだ。

「え・・・ちょ・・・」

この世界に不思議があるとすれば、こういうことかもしれない。光を発しているくせに、闇に対して照らす影響力は無いかのように、その場所だけが淡い光で包まれている。こんな時に何だが、幻想的で美しい・・・そんな事を思ったりもする。

どれ位の時間が過ぎただろう。

『・・・もしかしたら、光の屈折？』

そう思える程の長い時間が過ぎ、この奇妙な現象に、恐怖が遠のく錯覚に陥り始めていた。だからだろうか、思わず、そう思わず手を伸ばしてしまった。あともう少しで、その淡い光に触れようとした瞬間、

「馬鹿なの？」

何の高揚もない、台詞のような言葉が、耳に届いた。

「ねえ・・・危機感ないの？」

相変わらず、球体は淡い光のままだったが、言葉を発する物体に言

葉を無くす。・・・とうとう、私おかしくなってしまったのだろうか？会社はどうしよう。友人は悲しむだろうか？生活出来なくなっちゃうな。あーきつと誰かに迷惑をかけてしまう。こんな状況下で、漠然と考えながら、私はその光を見つめていた。

「危機感無い人間で怖いわね。今貴方は、この世界では考えられない状況に立たされている筈だけど・・・よく不用意に触ろうなんて気になるわね？ 何に対してもそう？」

幻聴まで・・・それにしても、これは私の中の声なのだろうか。だとすると、随分と容赦がない。

「そう・・・かもね」

その光は明らかに失望しているかのような声を上げた。あまりに流暢に会話が続くものだから、会話をする事に違和感が無くなっている。

「貴方に言いたいのは、自分のルールが世界の常識って思っていないかって事よ。私のルールから言えば、未知数の物体に自ら触れる行為は自殺行為だと思っし、貴方がどっぷりと浸かっている絶望も、貴方だけのルールによって作られているっていうか、がんじがらめに縛られているように感じるけど？」

そもそも、未知数の物体に安易に触れる行為が、この世界の常識だというのなら、私がおかしい事になるけどね」

この物体の言葉は、至極当然だった。通常であれば、恐怖が先に立って触ろうなんて気にもしないだろう。お酒が入っているせいなのかかもしれないが、危機感が無いと言われれば、その通りだ。しかし今は恐怖よりもこの物体の発する言葉に、気持ちが悪く反応してしまう。

「私が今の状況を作り出しているって？」

「そうよ。状況はどうにでもなるのに、周りが変わる事に期待するが故に生まれてくる、絶・望ってやつね」

グツと手に力がこもり、体全体にじんわり嫌な汗を掻く。こんなお決まりのセリフに、いちいち熱くなってどうするのだ。どんな窮地

に追い込まれようと、何度も自身をコントロールしてきた。そう思いながらも、今日の理不尽さを思い出すと、感情が先に立つ。

「っ・・・！ 私は、私のルールでこんな状態になっているわけじゃ、ない！ 確かに全て私が選んできたわけだけど、世の中には不可抗力で、どうにもならない事があるの！ 嫌なら辞めることも選択肢の一つだなんて、他人だから言える言葉よ！ 生きていかなきゃいけないのに・・・。 私は、私の限られた資源の中で出来ることをやっているだけよ！」

激しく高鳴る心臓が、今にも爆発しそうだ。

第1章 Usual spot - 5

光は、くつくつと笑いながら、上下に震え、そして・・・、

「ぷっ！ あーははは。それって自分の中で使いならされた言葉？ そうやって自分に言い訳しながら生きてきたの？ もう！ ヤダ」

「・・・は？」

笑いを堪える必要がないと言わんばかりの態度に、この夢が妄想から一刻も早く覚めたかった。何故どうにもならない現状を、否定されなければならぬのか。この声が自分自身としても、息をするのも苦しくなる程悔しくて仕方がない。可笑しくて仕方がないと言わんばかりに、光の玉は未だに上下に震えている様子を見て、屈辱から布団を頭から被った。

・・・寝よう。病気のことは、明日考えよう。明日の朝、このままだったら病院に行こう。これからの事も、明日ちゃんと考えよう。全ては明日だ。

「・・・」

部屋に静寂が訪れ、自分の息遣いしか聞こえてこない。布団の中で、少し息苦しさを感じながら、どうかこのまま寝てしまいたい。このまま光が消え失せて、私をかき乱す余計な事を言わないように、ただただ祈っていた。そんな私の願いも虚しく、

「ねえ・・・」

自分の心の声なのか、光は執拗に話し掛けてくる。

「この状態を無視して、寝てリセット出来るなんて思っている時点でおかしいでしょ？」

『違う！！ これは夢だから！！！！』

微動だにしない私に向かって、淡々と言葉を繋ぐ光に、ジワリと嫌な汗をかく。こんな非現実をどう受け入れればいいのか。先

程の怒りの感情は通り過ぎ、今は明日から直面するであろう現実に、考えがまとまらない。

「・・・ふう。幻像でも、夢でもないわよ。私は」

布団をはぐ事も出来ず、それでも光の発する一言一句を逃さぬように、全神経が言葉を追うのだ。一体、何がどうしてしまったのだ。

「大体、皆自分がおかしくなったか、夢かかって思うのよねえ。確かにこの世界では現実的ではないかもしれないけど、全く他の発想は出来ないものかしら？ 自分達の世界が全てだと思っている、人間らしいと言えば人間らしいのかしらねー」

布団を上げる事も出来ずに、布団の中の暗闇を凝視し続ける。

『・・・やばい・・・。本気でやばい。現実逃避もここまで来ると、救い様が無いんじゃない？』

これって日常生活が出来るレベルなのかな。どっちにしても、人に迷惑は掛けない様に・・・しなきゃ」

頼れる親戚なんて、知り合いなんていない。明日までこの状態が続くようであれば、正気の内に対策を取らなければ、真剣にそんな事を考えていた。

布団に包まっただまま、反応しない私にお構いなく光は語り続ける。私に言い聞かせる訳ではないのかもしれない。まるで独り言のように、ブツブツと呟いているのだ。

「そもそも、この生きにくい世界に固執して生き続ける理由はなに？ 生きとし生ける者が、純粹に生きている事が、自然の摂理ではないの？ 何故どう生きているのか？ が、重要になるのか理解出来ない。

考える事を与えられた人間の悲しいサガ？ 生きている事が一番重要ではないの？ その理由すら追及せずに・・・一生自分は幸せではないと考え続けるの？」

光の問いかけに、ガバツと布団を剥ぐ。きちんと終わらせなければ、きつと朝までこの状態だ。明日は仕事だというのに、冗談じゃ

ない。一睡もせずに仕事をするなんて、今の私には考えられないのだから・・・こんな状態に陥っても、明日の仕事の事が気になってしまふ。根っからの仕事人間だと思つと苦笑いだ。私は光と対面し、私は無意識に大きな息を吐いた。

「私に、何が言いたいのか？」

（続く）

第1章 Usual spot - 6

光は相変わらず、鈍く光り続けている。

「提案があるの。貴方にとっては現実的ではない話をするけど」
先程までの軽口が一切消え去り、急に声のトーンを落とし話し始めた。光から語られる内容は、夢の様な話で、現実離れた内容に、やはり夢なのか・・・そう感じざるを得ない。光の声だけが響く空間は、光と私だけが存在して居るかの様な錯覚を覚える。

いやにゆつくりと誘うその声は、底に沈んで行くようだった。地の底から響く様な、優しい母の声のような、逆らえない父の怒鳴り声のような、何とも表現する事が難しい。今まで聞いた事がない、音に堕ちて行く様で、足元が覚束ないようで落ち着かない。

「短的に言うけど、この世界を捨てて、貴方の経験を活かせる世界に行ってみない？」

「・・・転職のお誘いな訳？」

敢えて言ってみたが、言葉にした事を後悔する程の冷やかさに、グツと言葉に詰まる。

「・・・生きていく場所を、ちよつとそこまで変えてなんて話ではないわね。

この世界、貴方が生きているという現実を捨てて・・・そうね、この世界で一度死んで、私が生きている世界に来てほしいって言ったら、分かる？」

光が発した「死ぬ」という言葉だけが、やけに現実的に感じて背中がゾクリと冷えた。状況的に簡単な話ではないと思っていたが、夢にしても妄想にしても「死ぬ」などと聞くと、ゾツとしない。

『え？死ぬ？えっ？何故？？もしかして、やっぱりやばい状態？何なの？いきなり死ぬなんて』

沢山の疑問が浮かんでは消える。緊張と恐怖のあまり、少し声が上

ずっているかもしれないが、何とか声を絞り出し問うた。

「・・・死ぬのは困るよ、勿論」

「何故？」

何故困るのか、本当に理解出来ないと言わんばかりだ。いや、何故分からないのか理解出来ない。「何故？」この言葉に迷いからではなく、あまりにも常識的な問いに、直ぐに答える事が出来ずにいた私の戸惑いなど何の障害にもならないと言う様に、爆弾発言を放った後でも変わらない声は、淡々と言葉を繋ぐ。

「あゝこの世界では死ぬって言う事よ。死ぬといっても、別の場所生きていくの。」

そもそも、今でも何故生きているのか分からないのでしょうか？ 貴方はこんなに頑張っているのに。誰も貴方の価値に気付いていないということは、ここに貴方の場所は、ここではないのではないかしら。恐らく、どれだけ時間を経過したとしても、貴方が置かれた状況は変わらない。いいえ？ 年を重ねていく分、もっと生きていくことが辛くなるわね。だって、周りが貴方の価値を分かっているんだもの？

辛いわよ。年を取った後に、後悔しても遅いのよ。断言出来るわ、貴方は、何度でも絶望を、繰り返す」

いや、死んで別の場所って・・・行つてどうする！！ そう突っ込みを入れてはみるが、光の言葉に思わずゴクリと息を飲んだ。今の状態よりも悪くなっている・・・将来の私。あまりにもハッキリ断言するものだから、予言の様に脳内に響く。

「・・・そんなこと、分からないでしょ・・・？」

・・・フッフ

まだ分からないの？ そう言わんばかりに、光は侮蔑した失笑を發する。

「分かるわ。貴方は、数年前も同じ悩みを抱えていたわ。ただ今と違うのは、まだ将来に対して希望を持っていた事。多少若かったから。何事も経験だと思っていたのではなかったかしら。ま、仕事

だけではなく全てに、おいてね。

ほら、現に現状は悪くなっているじゃない？ 何にも変わっていないわ」

光は、一切私への気遣いを排除し、一方的に捲し立てた。そして「現状は悪化している」と言い放った後、一時の静寂が訪れた。私の思考は、今や目まぐるしく動きまくり、心臓は痛い位に高鳴り、息をするのも苦しい。断る言葉が即答出来ないのは、光が発した先ほどの言葉によって、押さえつけられているからだ。

『・・・そうだったな』

認めたくない、そう頭では強がってみても、心は激しく動揺していた。確かにそうなのだ。少し状況は変わっているが、今と差ほど変化がない悩みを抱えていた。変わりたくても、変わらない自分。

自分の現状は・・・悪くなる一方だということに。

第1章 Usual spot - 7

「変わりたくないの??」

そんな言葉に、グツと体に力がこもる。この光は、私の思考が読めるのではないか? 冷静になろうとする私の心を、ピンポイントで掻き乱す。

「・・・変わる?」

思わず光が発する言葉を、復唱してしまう自分が悲しい。何故、聞いてしまうのか? この異様さは明らかなのに。私の反応に感触を得たのか、高揚したような口調に変化しつつある。

「ええ。それは勿論保障するわ! 私の世界は、一〇〇%実力世界だもの。この矛盾した世の中よりも、随分シンプルよ。」

貴方達は、私の世界でいう英雄なの。世界の民は、貴方達をエンダと慕い、尊敬し、崇めている。こんなちっぽけな世界での貴方の絶望なんて、取るに足らないものよ」

「具体的に何を?」

光は私の言葉に強い感触を示し、興奮して居る様に見えて、私の心が警鐘を鳴らした。「危険だ」と。この状況下で興奮している自分がいる事是否定出来ない、と同時に冷静に分析をしようと躍起になっている事も事実だった。

「・・・。私の世界の民を救ってほしいの」

その光は、つい前までの饒舌が嘘かのように、随分と言葉を選択しながら話を進め始めた。

「今、私の世界は、今にも滅んでしまいそうな程、危機に瀕しているわ。罪もない、弱者が苦しんでいる。この状況を打破する事ができる救世主を、世界の民は探している。」

「・・・貴方だったら出来ると思ったの。だから、タブーを犯してこの世界にやって来た」

光の言葉は、私の心を熱くする。私だからこそ出来る何かがある

らしい。しかし、その症状を恥じながら、私は冷静に、冷静に自分の心を諫める。

「あのね・・・。私に何が出来るの？ 私には特別な力も、人並み以上の腕力も、知性もないわよ。もつと言え、もう四〇歳も近いおばさんなの。この世の中には、もつと貴方が望む能力を持った相応しい人がいると思うけど？」

・・・そう、私に何が出来るのだ。この世の中さえもままならないというのに。言葉にしてみても改めて思う。こんな私に何が出来るというのだ。しかも「死んで」行くという。そんな事は出来ない。ここまで考えて、自分の発想に可笑しくなった。

『これは夢なのに。若しくは、私の現実逃避なのに、真面目に・・・馬鹿みたい』

私が、こう答えるのを待っていたかの様に、光は間髪入れずに答えた。夢だと思いながらも、夢にしてはリアルな展開に、心の中でブツブツと分析を続ける。どうしても私でなければならぬ理由が見つからないのだ。

「この世界の常識なんて、何一つ関係ない！ 年齢も、能力も、何もかも超越して人間の資質だけで戦える世界なの」
更に強い口調でその光はこう言い放った。

「だからこそ、私は貴方を選んだ。人として、常識のある貴方に託してみたいの！ だってそれが、私達の世界にとって絶対無二の強さになるから」

分かってる。分かっているのだ。この光は、私の一番弱い部分を見越して言っている事位。こう伝えれば私が反応する事を見越している。目的は分かったものじゃない。それに、それは人として正しいのか？・・・そう思っているのに、何かが変わる・・・そう考える自分がいる。

・・・それでも、私の中の声が、本当にそれでいいの？ そう問うのだ。

この世界を中途半端に逃げ出して、次の世界で上手く生きていける筈が無い、と。

「死んで生まれ変わりたいと思えるほど、自分が不幸だとも思えない。悪いけど、他をあたって」

馬鹿な私・・・この世界から逃げ出してどうするの。仕事だって、私だから出来ている事があるはずよ。こんな事、絶対あっちゃいけないよ。いくら夢だとしても、そんな事に希望を持つちゃ駄目だ。そう、今までの人生や友達全てを投げ出していい筈なんて、ない。・・・これが私の妄想でなければの話だ。

少しの沈黙後、光は怒りを爆発させる訳でもなく、抑揚のない声で呟く。

「ふ・・・ん、そう？ また、来るわ」

光がそう告げた瞬間、部屋の中は漆黒の闇が広がり、そこには隣の住民のテレビの音だけが、低く響いていた。

第2章 The selection - 1

パソコンにデータを打ち込みながら、昨日の夜の事を思い返していた。気もそぞろになり、何度もバックスペースキーを押す。

『夢・・・』

いや、夢にしてはリアルで生々しい。何度も「変な夢を見た」と思おうとしても、光の一言ひとことが、頭から拭う事が出来ずにいる。こんなに鮮明に覚えているなんて、未だ嘗て体験した事がなかった。でも・・・と思う。

【自分の世界を救って欲しい】

そんな本やゲームの中の話・・・正気の沙汰ではない。本気で病んでしまったのかと思うのだが、目が覚めたら全てがいつも通りだった。しかし、病気の人間は一样にそう思うのではないだろうか？

『・・・どうしよう、病院に行くべき？』

「はあー」

無意識に溜息を吐いた。周りの雑踏が、遠い場所から聞こえてくるような感覚に陥る。気が重い。気持ちだけがやけに高揚して、反動でとても疲れた感じに良く似ている。朝からずっとこの思考のループに陥っていた。

『今すぐ帰りたい・・・』

目頭を押さえながら、けだるくパソコンに目を向ける。先程からちつとも仕事が進んでいない。積まれた書類に目を向けて、溜息混じりに手を伸ばしたその時、右下から社内メールが浮かんた。

【お疲れ様】

『え、沙織？』

今日は朝から外回りだと言っていたのに、社内に居る事に驚いた。

【おはよう。朝見かけたら、何だか疲れているかなって感じだよ。大丈夫？ 昨日飲みすぎちゃった？】

彼女の優しさが、文面から滲み出ている、いつもより何倍も嬉しかった。気にかけてくれる人がいる。それが、有り難くそして嬉しい。『それなのに、自分の中の声なんかに心乱されて馬鹿だ、私。私ってば・・・単に寂しかっただけなんじゃない？』そう思うと恥ずかしさに顔が熱くなる。

【昨日はお疲れ様。 実は昨日、変な体験をして】
いけない。本当におかしくなっちゃって思われちゃう。一気にデリートキーで削除をしながら、何とか無難な文章を打ち込んでみる。

【昨日はお疲れ様。 あれゝ外回りは？】
愚痴が多くなっちゃったけど 楽しかったね。 聞いてくれてありがとうゝ！ すっきりしちゃった。

疲れてる？ そんな事ないよ。 でも、昨日少し飲みすぎちゃったのかな？ 夢見が悪くて（<―>） でも、大丈夫。

気にかけてくれてありがとう！】
・・・送信、と。 夢見が悪いという事にした。 私、大丈夫だよ。

「ふー」と一息ついた時、彼女からのメールが浮かび上がってきた。返信が早い！ 夢見が悪いなんて書いたから、心配してくれているのだろう。 心配させた事を詫びながらも、心穏やかにメールに目を移す。

【外回りだったんだけど、急遽予定変更になったの。
ふふふ。 その夢見の話聞きたいな。一緒にランチしようよ！】

沙織の存在は、自分は孤独じゃないと気づかせてくれる。今日の朝、普通に目覚めて良かった・・・仕事に来る事が出来て良かった。そして、そう思えて良かった。 腕時計に目をやると、後二時間足らずでランチの時間だ。 つい先程まで、中々手が出なかった書類の束に手を掛けた。

『二時間あったら終わるわね。 よし、ランチを楽しめるように、頑張って終わらせちゃお！』

最近忙しかったから、少し疲れていたのかもね』
そう思うと、心なしかキーボードを弾く指先が、軽くなるのを感じた。

第2章 The selection - 2

沙織の言葉に、微笑みを堪えながら、ランチの了承メールを飛ばした。

『あはは。大した夢じゃないって。でも、ありがとう！ じゃ、パスタ行く？ ほら、この前行った（ハ・ハ） じゃお昼にね』送信、と。思わずニンマリ口元が緩む。

「あら、何だかご機嫌ですねえ」

同じフロアの後輩が声を掛けてきた。

「え？ そう？」

データを打ち込む手を止めて、上司からの視線を阻むように背を向け対応する。こんな場面を良く思う上司ではないからだ。少しでも長く話そうものなら「給料泥棒かね。就業時間中は、集中してほしいものだがね。」なんていう声が飛んでくる。当たり前前の注意だと思っているが、今日はこれ以上の気遣いは出来ない、そう考えての対応策だった。

「忙しいけど、もうすぐこの仕事が終わるそうだからかな」

そう答えながら、朝のセットにどの位の時間を要しているのか想像も出来ない、完璧な風貌に少し見とれながら笑った。

「そうなんですかあ？」

後輩は大きな瞳を更に大きくしながら、髪をクルクルと指で回しソツと耳打ちをする。

「昨日の・・・あれ。気にしない方がいいですよ。あの粘着質って、もう病気ですから、ね？ みんな言っていますよ。嫌がらせだって」

この会社の女性社員だからこそ、分かる暗黙の空気が流れる。私は、小刻みに頷いた。

「じゃあ」

そう言いながら、後輩は屈託のない笑顔で微笑み、その場を後にし

た。彼女の言葉は、私に対する嫌みではない。

これが会社の現状だ。この会社の女性社員は、希望をもって入社した時から、長い年月を掛けて、少しずつ仕事を諦め、この会社に期待する事を止める。先程声を掛けてきた後輩も、入社当時は会社の在り方に随分と会社に警鐘を鳴らし、戦っていた一人だった。しかし、

「これ以上会社の方針に納得できないのであれば、部署移動も・
」

そんな会社の声に、女性社員は落胆し諦める。だから、それぞれが方向修正を行っていくのだ。ある者はプライベートに。ある者は結婚に。ある者は外の世界へ可能性を求めて、会社を辞めていく。女性蔑視だと叫ぶ前にやる事があるのでは？と思う時期もあった。しかし、会社全体に根付いた覆らない現状に、皆の思考は止まるのだ。私は、どこにも行けなかった。社会人として与えられた仕事、そしてそれ以上の可能性を信じて、疑問を繰り返しながら、方向転換が出来ずここまで来たのだ。

これ以上考えてはいけない。ここで、私は思考を止めた。

「で？　どんな夢だったのよ？」

ゴルゴンゾーラのパスタを口に運んでいた私に、沙織は嬉しそうに聞いてきた。

会社の近くの洋食店で、既に店内は一杯だ。私たちは十二時丁度にダッシュをして、何とか席を確保出来た。必死に走ったものだから、到着した時には息切れがひどく二人で笑った。スパゲティはとても美味しく、沙織との会話は楽しくて、朝の憂鬱な気持ちを、あつという間に払拭してくれる。

「何でそんな嬉しそうなのよ？」

私は話したい衝動を何とか抑え、ニヤニヤ笑う沙織に問う。

「だって、夢見が悪いつて言っている割にすっきりした顔をしているじゃない？　実は素敵な夢だったのかしら？　って思ってたね。」

ねえ？ ホントに夢の話？？」

もぐもぐと口を動かしながら、それは貴方の気遣いが嬉しいからなの……そう暖かい気持ちになって自然と笑みが零れる。

沙織の言葉に背中を押された気持ちに成り、

「昨日の今日でそんな事、ある訳ないじゃない！

うーん、あのね……笑うよ。絶対。人の夢を聞きたがるなんて、変な人」

まだ話してもいないのに、嬉しそうに笑う沙織を見ながら、絶対笑われると確信した。私はかなり用心深く、内容をかなりオブラートに包んで、あたかも夢だったかのように（実際夢だったと思うのだが）昨日の夜の事を話した。

「で？ その光から自分の世界を救ってくれて言われたって？」私の言葉を復唱しながら、沙織はポカンと私を見ている。私は波立つ心臓を必死に隠しながら、とぼけた顔で彼女を見る。

「ねえ？ 変な夢でしょ？？ 何だか可笑しくなっちゃって」

沙織は、止まっていた手を思い出した様に動かしながら、スパゲティをパクリと一口頬張った。モグモグする口を押さえながら、今にも吹き出しそうな顔をしている。

「ん、もう！ 何の願望よ？ 勇者に成っちゃうの？」

二人、「無いって！ そもそも成れないって！ て言うか、無理だから！ あはは！」と噴き出した。

「なーんだ。何とも思っていなかった人が夢に出てきて、好きってことに気付いたの……なーんていう甘〜い展開を期待していたのに。ツマンナイ！」

沙織の想像力の豊かさに、思わず笑いが出てしまう。

「言っただじゃん、変な夢だって。そもそも、一体なんの妄想よ。さすがに、それはないんじゃない？」

完全否定する私の言葉に、

「分からないじゃない？ 駄目よ〜自分から否定したら、夢にも出ないからね」

そう言いながら、沙織は少しプツと頬を膨らませ、悪戯げに笑った。私は、そんな彼女を見て、ホッと体の力が抜けた。

『なーんだ、やっぱり夢だったんだ』

いつもの日常に、自然とそう思えた。そうか、そういう風に笑い飛ばしてほしかったのか・・・。

「午後は？ 外出なの？」

「うーん。そうだねえ。予定はあったけど、今日は会社にいる予定。事務処理が溜まってて。いい加減マネージャーから怒られそう」

食後のコーヒーを飲みながら、ふうと彼女は溜息を吐く。私はお昼が終了する二十分前の時間が好きだった。明るい午後の光と他愛無い会話が、どうしてこんなに楽しいのだろう。

「ふーん。一日外出していると仕事が溜まって大変だねえ」

「いえいえ、一日パソコンと向き合っている方が無理ですから！」

「だから、事務処理溜まるんでしょ??」

「違うない！」

店を出る頃には、朝とは打って変わって、晴れ晴れとした歩みで部署に向かった。

第2章 The selection - 3

昼食から戻った私は、先程までの幸せな気持ちと相反した状況に追い込まれていた。

「少し時間、いいかね？」

上司がさも愉快だと言わんばかりに、ニタニタと笑いながら肩を叩いて来たのだ。いつもであれば、長々と自席で小言を言うタイプなのに、あえて会議室を指定してきた時、嫌な予感が過った。

広い会議室に二人が向かい合って座ると、圧迫される空気に気持ちがあたふた。そんな空気すらも楽しむ様に、上司は長い前置きを置きながら言葉を繋いだ。

「それでね。君に、会社からお願いがあつてねえ」

上司の猫なで声を聞いた瞬間、後頭部から背中にゾワツとした感覚が流れた。もったいぶりながら、あのねえ、でねえと繰り返している。

「庶務に欠員が出てねえ。ほら庶務って仕事は地味だけども、やる事いっぱいあるじゃない？ だって、社員が働きやすい状況を作るのが仕事でしょ？」

「・・・・・・あの、それで・・・・？」

この後の展開は、聞かずとも分かる。上司の言葉を待つまでも無く、私の脳裏には様々な思いが駆け巡る。

『・・・・庶務？でも、まさか？ 部に私がいなくなったら？ いなかったら？』

出世をする道はなくても、それは会社の方針だからと思っていた。私の存在は、認められていると、認められている筈だと思って頑張ってきたのだ。目の前の男は目を細めながら、嬉しそうに薄ら笑いを続けている。言葉を発せない私に向かって、トドメを刺す様に大きく身を持ち出す。

「ふう。だからねえ、長く経理で実績を積んでもらった君に、今度は庶務で活躍してほしいと思っっているのだよ」

・・・その経験を活かす仕事が庶務課にあるとは思えない。いや、庶務の仕事がどうと言う訳ではない。会社は無駄な仕事はない。会社に所属している以上、異動は当然視野に入れておくべきだろう。会社は組織なのだから・・・そう思っているのに、思考は拒絶を続ける。

『分かっている。分かっているけど！今の部署で頑張ってきた・・・それが唯一、この会社にいる理由だった。それだけを支えに、仕事に取り組んで来た。それだけが、私の誇りで。それだけが、私の希望で・・・』

（庶務課は、長年勤めてきた女性社員の、最後に行き着く場所とされている場所だ。評価は厳しく、社内の不満の捌け口。会社がこの部署に辞令を出すときは、リストラ勧告と同じだといわれている部署。またの名を、「不要島」。忌み嫌われる部署だと言われている。ここに異動を命じられた社員は、それだけで退職を決意する程の部署だった。）

この会社に勤めてきて、初めてじわりと目頭が熱くなった。しかし寸でで、その感情を押し殺す。この人の前で泣きたくない、その一心で何とかその一線を越えずに済んでいた。

「課長、私の・・・仕事は？」

「あー。君はもうその事は心配しなくていいよ。僕が見るから。大体さあ、君少し立場をわきまえて発言したまえよ。この前だって僕が分かっているような発言なんてして、僕の立場ないじゃない？まあったく！飛ばされても文句言えないよねえ。見ている人は見てるっていうかさあ。」

だいたいさー長年勤めているからって、勘違いしていないかね？仕事は年数じゃないよね、どれだけ仕事に対して誠意と責任を持

ってやるかでしょう？ 自分の専売特許ですゝみたいな顔してもらっても、会社として迷惑っていうか、そんな会社の迷惑、分かっている？ そんな・・・」

どこかの自己啓発の本を読みあげる様な言葉は、私の中に何一つ入って来なかった。

『この前の報復？ そんな理由で？』

「自分だけが、全体を把握しているなんて思っている訳？ そんな訳ないよねえ。マニュアルが徹底されているこのご時世に。誰でも出来るつての。あんな仕事。」

自分だけが特別ななんて思っただけで仕事されると迷惑だ」

私を飛ばす理由をずらずらと並べ、課長は捲くし立ててくる。ガランとした会議室に、上司だけの声が響き、頭の中で木霊するような錯覚を覚える。

「おっしやられている意味が、分かりません」

こうなると、手がつけれない。でも、言わずにいられない。勿論仕事で、彼の事を馬鹿にした態度を取ったつもりは無い。チームの事を思い、経験からくる助言だと思っていた。そんな風に思われてしまっていたのかと思うと、もう自分の全てが否定されたような気がして、自分がこの場に居る事自体が不思議でならなかった。

私の言葉がカンに障ったのか、フーフーと荒い息を吐きながら、こう上司は吐き捨てた。

「ていうか、も、明日からうちの課に来なくていいから。荷物まとめて、とつとと庶務に行つてよ」

この言葉に、今まで我慢してきた感情が、一気に沸点まで到達し、そして弾けた。何なのだ、この状況は。

「その言葉は、会社のご判断ですか？ 部長に確認させて頂いても宜しいのでしょうか！」

私の剣幕に、切り札と言わんばかりに、ニタリと笑う。

「ふう、当たり前だろ。会社からの辞令だよ。君に対するね。あ

くまで僕は、代弁者だけど？」
そう言い放った。

『え……？』

底の見えない地底へ、一気に突き落とされた……。そう感じた。これが会社の判断だつて？ 意も言われぬ、虚無感が襲う。

何故？ 何故に、長年頑張ってきた私に？ ここまでの仕打ちって何なの？ 誰にでも出来る……。そんなことは分かっている。

『ふ……。リストラ対象者は、皆一様にそう思うか……。』

突き付けられた現実に、何だかもう、どうでもよくなってきた。窓から差す午後の暖かい日差しですら、私の気持ちの慰めにもならない。廊下から聞こえる雑踏が、別の世界の音のように聞こえて来る。仕事も、会社も、この上司も、怒りも、悲しみも、どうでもいい。

さすがに、ジワリとくる感情を抑えきれなくなる。あーもう耐えられない。いつその事、辞めてしまおうか。考えていなかった訳ではない。今の生活は出来なくなるかもしれないが、今以上の屈辱があるだろうか？

今までの自分を思うと、可笑しいのか、悲しいのか、何故か全てが混じり合い、自虐的に少し笑った。

第2章 The selection - 4

その刹那、突如昨日の光が現れた。

「え」

あまりの衝撃で動けない私に、その光は気だるそうに単調な声で、合わせてこの状況が当たり前と言わんばかりに告げる。

「さあ、どうするの？ 昨日はあせって台無しにしちゃうと元も子もないから、一旦引き下がったけど、正直あんたに付いているのも飽きちゃった。何とか扉は開かれたし、もう強引にでも連れて行くわ」

「何故・・・ここに？」

光の先に居る上司に目を向けると、こんな状態にも関わらず、にやにやと締らない顔をしている。

『私・・・しか見えていないの？ やっぱ私がおかしく・・・』
絶望の淵に立たされる思いで、もう一度目を落した時、上司の異変に気付いた。確かに笑いながら座っているのだが、明らかに人間のそれらしくない。人間はこんな風に、不自然に存在する事が出来るのだらうか。

一瞬、突然の光の出現に、驚いて動作が止まっているのかと思っただが、全てが一瞬にして画像として切り取られたようだった。半開きの口、そして今では焦点が定まっていない目。正に蠅人形そのものだ。

『な・・・何？ 何が起きているの！』

あまりの非現実的な光景に、思わず叫ぶ。理解の範疇を超える状況に、ゴクリと息を飲んだ。

「何なのよ！ 私がおかしいの？ 何故私なのよ！」

「もう、本当に面倒くさい・・・この女」

私の叫びに、ブツブツと言葉を繋ぐ。

「あゝうざい。たく、こっちの人間は、何故にそう考えすぎるのかしら？ もう少し、シンプルにしてくれない？ 面倒だわ。それとも、自分の世界の常識以外を、受け入れるキャパが少なすぎるのかしら。」

「あ．．．本当に理解不能。あんたである理由は、昨日伝えたわ。ま、もっと言うと、子供だと死ぬ事を現実には捉えられなくて、すぐ死んじゃうって事かしら」

「光の玉は私の存在など、どうでもいいというかのように、独り言のように捲くし立てている。」

「ゲーム感覚だといった結果を出すんだけどねえ。少し痛い思いしただけで、戦意喪失しちゃうし。自分の限界が図れなくて、力のコントロールにムラがあるし．．．。だから、簡単に生まれ変われる、元の世界に戻るなんて夢を見る。大人も同じようなものだけど、諦めも早いから。」

「物事の道理が分かる前から育てても良いのだけど、そんな時間も無いしね。じゃ〜どうしようかなって考えた時、大人に目を付けたって訳。人間って人生が半分を過ぎると、漠然と命は永遠ではない事を認識する様になるのよねえ．．．それに、特にあんた、もうこの世界にいない人間じゃない？ 通常は成功者が選ばれるけど、あんたに限っては、この理由しかないって」

「あ．．．の、どうするつもり？」

「全く！ 思った以上に時間が掛かったわ。最悪最低な状況に追い込まれても、何かしら活路を見出したりして．．．本当に、冗談じゃないわよ。本当に厄介な人間。」

「私だって、もっといい人材に当たりたいじゃない！」

「私の質問なんて耳に入っていないようだ。明らかに私に対する不満にゾクリと背筋が凍る。意味は理解出来ないが、昨日とは、全く異なる状況である事だけは明らかだった。こんな場所に突然出てきたのも、状況が切迫している様に感じる。」

「扉が開いたって何！？」

さすがにもう夢だとは、思えなくなってきた。何よりも、この状況は異常だ。

思わず後ずさりをした瞬間、光から鋭く何かが伸びて手を掴んだ。
「いやっ！」

そのまま今まで味わった事が無い程の力で、グツと吊るし上げられた。余りにも強い力のせいで、掴まれた手首から血の気が引き、思わず唸る。何とか振り解くべく、手を掴んでいるものに目を移した時、思わず目を疑った。

それは手だった。しかし、只の手では無い。私の手を掴んでいる手？・・・え、これは骨？

「言っただでしょ。あんたが生きている現実を捨ててって。あはは。」

あゝはははははは！！

光の感情は今や沸点に達したかのように、甲高い高笑い繰り返す。この異常な状況に、恐怖のあまり動く事も話す事も出来ない私に、その光はこう繋げる。

「死にたくなつた訳ではないみたいだど・・・でも、未練もないでしょ？」

そんな恐ろしい言葉と同時に、グイツと光に引き寄せられた。光だけで、他は何も見えない。見えない事が救いとすら思える。

「痛！！」

更に腕をねじ上げられ、骸骨の手は今や目の前まで迫っていた。もう、私の存在なんてさほど重要では無いと言わんばかりに、自分自身に言い聞かせるように言葉を繋げる。

「もう、私は十分待ったわよね？ 多少強引でも、もう構わないわ。」

そもそも、貴方が良い理由なんて知らないわよ。私が聞きたい位だわ。

ネガティブでえ、力も無いくせに正義感だけが存在価値で？ 正

しい事をしていれば幸せになれるって思っている馬鹿な生き物。正に暗いったら。なのに、何の努力もしない上に、全てにおいて中途半端で。

今までスカウトしてきた中で、一番つまらない人種。それなのに、あんた、また頑張るつもりでいたでしょ？ 我慢出来なくなっただわ、いい加減。

何とか扉は開かれたし、あんたの意志なんて、どーでも良いの。強引にでも、連れて行く、わ！！」

掴まれた手に、更に力がこもる。

「私、本当にあんたが嫌い。あの世界で、さっさと、のたれ死になさい。」

悪意が籠る言葉と声に、体から汗がドツと噴出した。自分自身に何が起こっているのも理解出来ない。理解出来ないが、昨日とは打って変わって危険な状況である事は確かで、生まれて初めて「死」というものを、強く実感する状況に追い込まれている・・・それだけは理解出来た。

第2章 The selection 5

ギャハハハ!!!

さも愉快だと言わんばかりに、光が笑う様に、目を背ける事が出来ず直視してしまう。死ぬ恐怖よりも何倍もこの光が怖い。更に締め上げられ血の気が引き、もう駄目だと意識が朦朧とした時だった。

バン!!

その刹那、会議室のドアが、勢いよく開かれた。驚いて振り返ると、颯爽と入ってきたのは、誰でも無い、沙織だった。

「沙織!?!」

知った顔に、思わず叫ぶ。いや、ここは会社だ。誰が会議室に入ってきてても、おかしくはない。しかし、こんな不可解な状況に、知った人間が現れる事に驚いた。使用中なのを知らなくて、入ってきたのだろうか。

「逃げて!」

私は、無我夢中で沙織に向かって叫んでいた。彼女をこんな狂った状況に、巻き込みたくない! 光の後ろに蠟人形の様に存在している上司の様になってしまったら!

「何だかおかしいの! だから!」

それでも沙織は、何事もないかのように、ゆっくりと近づいて・・・そう思った瞬間、私と骸骨の手を振りほどいていた。その行動はあまりにも速く、一瞬何が起こったのか、動く事が出来なかった位だ。しかし一番驚いたのは、光の主だったかもしれない。一瞬沈黙が流れ、

「えっ? は? なに? あんたなんなの?」

動揺する声が響く。沙織に手を引かれるままに、今まさに私達がドアから抜けようとした時に、

「な! てめえ! 何者だぁー!!」

耳につく怒涛が、割れんばかりに響き渡った。その直後、空気を振らす衝撃が、私達の髪先を突き抜けた。揺れる髪に違和感を覚え、思わず振り返った先には・・・つい先程通り過ぎた場所が、音も無く挟られている光景が広がっている。それは正に一瞬にして、豆腐を押し潰したように、ただその空間だけがぼっかり壊れていたのだ。

「はっ・・・？」

言葉にならない。何が起きているのだ。一体、昨日から何が変わってしまったのだというのだろう。

「走れ！」

沙織の声に反応して、無意識に足が前に進んだ。沙織は私の手を引いて、中央のエレベーターを指し、廊下を駆け抜ける。毎日沢山の人が行き来する通路なのに、誰一人として会わない。扉の向こうに広がるはずのオフィスにも、人の気配を全く感じない。

何故私と沙織が、こんな状態で、ここにいるんだろう。

「どこに行くの！？」

エレベーターに乗り込むと、一階のボタンを押し、続けて「閉」のボタンを押す沙織に思わず叫んでいた。目の前の廊下に向かって目を見開き、ボタンを押し続ける沙織の視線を追った時、あの「手」が目前に迫っていた。骸骨の手だけが、私を捕まえんと骨だけの指を広げ、私達を追いかけてくる。

「ちょ！止まれ！！ふざけんなよ！！てめえ！！」

伸ばされた手に、『捕まってしまう！』恐怖に思わず目を瞑った瞬間、エレベーターの扉が閉じた。体に感じる降下感。状況の変化についていけず、息が上がる。

「あ・・・」

問いかけようとした私の言葉を遮り、沙織は言った。怖い位のまっすぐな目に、この異常な状態が現実であると思い知らされる。姿かたちは沙織なのに、醸し出す雰囲気は、全く面影を感じさせない。

とてつもない威圧感を感じる。

「契約は結ばれた。貴方は、もうこの世界に留まる事は出来ない。決めなければならぬ」

「沙織・・・？・・・貴方、誰？」

沙織はそこで一度、一息置き言った。

「New worldに先導する案内役を選択するのだ。私か、先程の骸骨の手か」

私は、思わず沙織の腕を握り締め・・・その自身の手を見て、今自分が大きく震えている事に気付いた。

「わ、私は何も契約なんて」

心臓の高鳴りで、声が上手く出ない。沙織は強い視線を投げたきり、微動だにしない。

「そうだろう。しかしあいつは、貴方の強い失望感を利用して、強引に扉を開けてしまった。

もう時間が無い。手短に言おう。貴方の精神は肉体から引き離され、この狭間の世界のみ存在している。この場所は、New worldの扉が開いている間だけ開かれる。もう幾分もしない内に消滅する・・・このエレベーターが下に着くまでに決めなければならない」

「死んだの？ 私・・・」

行きたくないって言いたいの、一切の拒絶を許さない物言いに、それだけが言葉として口から出た。滴り落ちる涙は、こんなに熱いの。

「あの光が現れた瞬間に、貴方はあの男の前で倒れた。本来は、この世界との決別を本人が強く望まないと開かれない扉が、貴方を絶望に導く事で強引にこじ開けたのだ。

そのお陰で、開いた扉の衝撃を辿り、私はここに来る事が出来たのだ。お昼に貴方の話を聞いて、目を離さないようにしていたのだが・・・巧妙に隠されてしまった」

体中の血が逆流したかのように、カーと熱くなった。その時の光景が目に見え。慌てふためく上司と、左遷を言い渡されてショック

で倒れた私。

「もう、この世界には戻って来られないの？」

「・・・その希望だけは捨てるのだ。もう貴方はこの世界の所有物ではない」

二人の間に、沈黙が広がった。暫しの間二人は、エレベーターが降下する階数を目で追う。三階のランプが付いた。もう一度沙織を見たが、不動のまま何も言ってこない。沙織ですら、味方ではないのかもしれない。当然の様に、この世界との決別を口にするのだから。

戻りたい・・・つい先程までの日常に。それでも、でも分からないけど、もうこれしかないのでしょうか？ 誰と行くかですって？ 心の中で降下する階数を数えた。二階、一階・・・ふーと大きな息を吸った。

「行くわ。貴方と」

（第2章 終わり）

第3章 New Land - 1

強風が女の体を揺らした。外気の冷たさが、体に吹きつける風が、否応が無しに体の自由を奪っていく。

「な・・・え？」

『ついさっきまで、エレベーターの中にいた筈・・・なのに？』
混乱する思考を何とか整理しようと躍起になる。しかし現実味が無い状況に、混乱し困惑し、思考回路が止まった。もう一度、周りの風景に目を向ける。

「ここ・・・どこ？」

どこまでも続く広大な土地、うつそうと続く深い緑の森、巨大な山脈が連なっている。空には雲が立ち込め、灰色の世界がどこまでも続いていた。

『一体どこまでが現実なの？』

そびえ立つ山脈とほぼ同じ高さに浮いている自分。風で息苦しく、今や女の体は、バサバサと風に振られる木の葉のようだ。たまらず隣の沙織の腕を掴んだ・・・筈であった。触れた感触に、激しい違和感を覚え体が固まった。想像していたそれとあまりに違っていたのだ。

受けた衝撃に女はそれを直視し、それも女を静かに見つめていた。
『・・・な、これは何？』

目の前の異質な何かは、明らかに人間ではない。しかし、地球のどれとも違う。

身丈は三メートル位あるだろうか。人間の手に当たるであろう部分は、足のつま先に当たるほど長い。首は飛びだし、顔の半分以上もあるうかという裂けた巨大な口。ギロリとした大きな目は金色に鈍く光り、獣の様に縦に黒い瞳孔が入っていた。それだけでも倒れそうな程の衝撃なのに、この生物は静かに、そして厳かに世界の序章を告げる。

「この世界に来たならば、これから起こるであろう事を全て受け入れることだ。貴方の常識はここでは通用しない。

しかし、受け入れなければ・・・そう、決して希望を失ってはならない。何を聞いたかは知らないが、貴方がこの世界に必要なことは確かなのだから。自分がやるべきことを探し出し、その為だけに生きていくのだ」

『しゃべる・・・ん、だ？』

「あ・・・貴方と一緒に？」

どこまで受け入れればいいのか分からないまま、女は生きて行く為に問うた。しかし一時置いた後に、

「・・・この世界に来たエンダに同行者はいない。基本、初めは一人だ。我々先導者がエンダと会う事は二度とない。」

この回答は、女を失望させるのに十分だった。日本という安全な国で、何不自由なく生きてきたのだ。今、こんな世界に放り出されたら、それこそ直ぐにでも死んでしまう。

「ちよっ！ 待つて。こんな場所で、一人で?? 言語は? 生活の糧は? こんな私に何が出来るの? 私に望むことは何?」

すぎるような気持ちで問う女に、緑の生き物は淡々と答えた。

「矛盾に感じるかもしれないが、エンダ個々に望む事は何もない。この世界で死なずに、生きる事だけだ・・・道は既に作られている」

「既につて・・・どの様に? あの骸骨は、この世界の人々を救ってほしいって言うていたわ。何かあるから、他の世界から私を連れてきたのでしょうか? どうすれば良いの? 教えて! 何を目的にして生きていけば・・・」

何とか喰い下がる女の言葉を、無情にも打ち砕く声が響く。

「今、全てを伝えることは出来ない。貴方が自分で気づかなければ、この世界に来た真の理由は解読出来ない。・・・何故今日という日が訪れたのか、分かる日が必ず来るだろう。今は、ただ生きることだけを考える事だ。そうでなければ、今日にでも貴方は死ぬ」

目の前の生き物は、女に質問の余地を与えない。しかし「死ぬ」その言葉だけが、脳裏に何度も木霊する。

『死ぬって・・・そんな世界だったなんて・・・？』

「時間がない。今から始まりの地に連れて行く。初期のエンダが、生きて行くのに最適な場所だ。そこから、状況を整えて・・・」

何一つ納得する言葉を得られずに、話が矢継ぎ早に進んでいく事に、女はどうする事も出来ずにいた。しかし刹那、沙織の事を思い出したのだ。

「さ、沙織は？ 無事なんでしょうね！？ 沙織に何かしたら・・・！」

『私・・・自分の事ばかりで！！・・・何かしたら・・・こんな生き物を目の前にして、何が出来ていうの？ こんなに震えは止まらなくて、異常な世界で体一つで生きている私に。』

・・・でも何が起きているのか全く理解は出来ないけど、私のせいで沙織に何かあったら！』

沙織を思うと、生きた心地がしない。女の言葉に、金色の瞳をジッと向けてその生き物は静かに答えた。

「問題は無い。我々は、直接あなた方の世界の人間に危害を加える事は出来ない。時々あの人間を通じて、貴方の情報を収集させてもらっていた。あの人間を媒体に出来たのも、狭間の世界が開かれたあの瞬間だけだ。あの光に包まれた骸骨も、貴方があの世界に居なければ何の手出しも出来ない。勿論私が近づく事も不可能だ。」

あの人間の貴方に対する慈しみが、私をあの場に導いた」

今この瞬間だけは、女は恐怖を忘れて目の前の生物にジッと目を向けた。一〇〇%信じた訳ではない。しかし自分を案じる沙織の優しさは、信じられる。そしてこの生き物にそう言わしめた沙織を思うと、目頭がグツと熱くなった。目の前の生き物の瞳の奥を読み取る事など到底不可能だが、見た目の得体の知れなさとは裏腹に、自分を導いてくれた行動を思い返し、漠然と、本当に漠然と、

『信じてても良いのだろうか？』

そう思い始めていた。

第3章 New Land - 2

「探した」

その時、別の声がした。この声には聞き覚えがある。一番受け入れがたい声が響き、女の体がビクリと揺れた。

『夢なら覚めて!!』

恐る恐る声の方向を振り返ると、目の前には山と見間違っほどの巨体がそびえ立っていた。

「え……」

隣の生き物の比では無い。女の世界では存在しない生物に茫然と立ち竦む。その女の前に、スツと緑の生き物が立ちはだかり、体格の違いに怯むことなく飄々と言葉を繋ぐ。

「ほお……よくこの場所が探し出せたものだ」

巨体の生き物は、噴き出す怒りを何とか押さえ込み、

「……接点地点を血眼になって探したわ。広い世界だからって、ゆっくり構えてんじゃないよ。こーの盗人があ!!」

感情が一気に沸点に到達する様に、語尾が大気を揺らす。手だけの骸骨は、今や身丈が一〇メートルもあるうかという巨体と化し、上半身が骸骨、下半身が馬の様な風貌に変わっていた。声を発している部分が顔なのだが、鋭利な牙……ここからの位置では、それしか見ることが出来ない。

『光の正体はこれだったの!?!』

手だけの骸骨の正体に、ガクリと膝が折れペタリと座り込んだ（と言っても、空の上で不安定この上ない）。目の前に立つ緑の生き物が、普通に見えてしまう程禍々しい姿だ。

「この女をこの世界に連れてくるだけに、どれだけの時間を要したと思う? 扉を開くまでに五年よ? 色々な手回しを重ねて（ここで何かを思い出したか様に、ギャハハと笑った）、やあっと開いたというのにい? それを横から? 冗談じゃないよ!」

ドン！！！！

言葉が終わるのと同時に、一瞬にして爆音と業火が渦巻く様に襲いかかってきた。世界を全て飲み込みそうな炎に、女はギュッと目を閉じる。

『死ぬんだ・・・私』

「目を開くのだ。これから先、如何なる苦難に立ち向かおうとも、見開いた目を閉じてはいけない。全てを見届け、己の進むべき道を見間違わない為に」

轟音に紛れて、緑の生き物の淡々とした声が切れ切れに聞こえてきた。その声に導かれる様に、目を見開いた時、一瞬心地よい風が吹いた。

「てめえ」

骸骨が黒煙を口からブスブス吐き、怒りにその身を震わせる。

緑の生き物と女を守ったのは、光の壁と見間違わんばかりの巨大な盾だった。荘厳な音と共に光の盾が出現し、幻想的な光景が広がっていた。業火は盾にその行く手をはばかれ、散り散りに消えつつある。

『今の何・・・？ 炎？ 盾？・・・どうやって出したの？』

目の前で繰り広げられる現実を受け入れきれない。

「その攻撃・・・この者を殺す気か？」

「てめえ、何者だ・・・」

全てを燃やしつくしたと確信していたのだろう。予想を反した結果に緊張感が漂う。

「どれだけの時間を有したとしても、この世界に来る者は、自らが扉を開けなければならぬ。だがしかし、お前は・・・この世界の秩序を破ったのだ」

何者にも屈しない強い尊厳を保ちながら、緑の生き物は淡々と答えた。

「チツジョー？ てめえ、覇騎王の関係の者か？ 古いしきたり

に縛られて、この世界を壊そうとした悪の権現。・・・ないな、全て滅んだはずだ。

そもそも、やり方がなんだって？ 正義も悪もねえよ？ 行き着く場所の一つだ。問題は、誰が連れてきたかだ。

ちなみに、こいつは駄目だ。絶対明日にでも死ぬね。別に捨て置いてもいいけど、こいつ殺さなきゃ気が済まな、い！！！」

骸骨は、発した言葉と同時に巨大な爪を振り落した。緑の生き物同様、女を捕らえた！！そう骸骨が「ニヤリ」と笑った瞬間、二人の姿は一瞬にして消えた。

「クソが！！！！」

女が体を掴まれたと認識した瞬間、体に強いGがかかった。体が押しつぶされる感覚に目がくらみ、今にも気を失いそうだ。受ける風圧で目を開ける事もままならない。

『あの骸骨から、逃げているの？』

最悪の状況に追い込まれている筈なのに、何故か先程の骸骨の言葉がやけに耳に残る。

『扉を開くまでに五年・・・？』

【この女をこの世界に連れてくるだけに、どれだけの時間を要したと思う？ 扉を開くまでに五年よ？ 色々な手回しを重ねて、やあつと開いたというのにい？】

『骸骨の手が、私を連れてくるのに五年を要した・・・？五年・・・？色々な手回して・・・え？・・・え？』

嫌な汗がジワリと全身から噴出す。「と、止めて」そう、思わず声に出した瞬間だった。更に体全体に強い衝撃が襲う。・・・そう感じた瞬間、女は緑の手から投げ出されていた。女は見た。天地の様子。そして緑の生き物が、自分からずっと離れた場所から落下していくのを。

女の意識は、ここで途絶えた。

第3章 New Land - 3

「うう・・・」

女は、冷たい土の感触、そして直接肌に触れる外気の寒さに目が覚めた。

軋む体を何とか起こし、周りを見渡す。先程の二体の生物の気配はどこもなく、あるのは見渡す限り無残にひび割れた枯れた土地だけだ。

「頭・・・痛い・・・」

まとまらない意識を何とか集中しようとするのだが、脳が考える事を拒否している。加えて頭が割れそうな程、痛い。

『寒い・・・』

身を刺すような寒さだった。今まで体現した事の無い気候に、身も心も凍りつく。寒いはずだ。女が纏っている物と言えば、肌着と、薄い皮のワンピース。そして、薄い革靴。それだけだった。何故か女は、これだけの装備で荒れ地に一人置き去りにされていたのだ。

あれほどの高さから落下して、何故無事なのだろうか。混沌とする意識の中で、女は必死に何かを思い出そうとして足掻く。思い出そうとする端先から、記憶がこぼれ落ちていく感覚。ガシガシと額を掻いた。

『思い出せ！ 思い出さなければ。大事な事が、忘れていけない事があつた筈。私は何故ここに・・・私がここにいて、理由。理由・・・？』

「お母さん・・・」

女が思わず唸る。自分が発した言葉に、頬を涙が伝い、

「お母さん・・・」

フラリと立ち上がり、どことなしに歩き始めた。ゴツゴツとした地面が、薄い足裏の皮に食い込む、

『痛い・・・寒い・・・。』

この広い空の下、どこに進むべき道がどこなのか分からない。しかし自分の何かが警鐘を鳴らす。ここにいたら確実に死ぬぞと、死にたくなかったら歩くのだと。心の声に従い、重たい体を引きずる様に歩き続ける。冷たい外気と、鋭い風が女の肌を突き刺していく。

「お母さん・・・お母さん・・・お母さん・・・」

思考はほぼ停止していた。意識して呟いている言葉では無い。しかし女は、呟くのを諦めない。何があっても、この単語だけは忘れてはならない、零れ落ちる記憶の奥に刻み込まれている。

ズルズル・・・。何日歩き続けただろう。革靴は既に原形を留めない程ボロボロになり、靴底はかろうじて薄皮で繋がっているばかりだ。原形を留めていないのは何も服だけではない。そこには嘗て女性であつた面影すらなく、痩せこけ全身が雨風や埃で真つ黒な女の姿がある。

寒い、痛い・・・もうそんな痛覚すら女にはない。状況は一向に良くならず、更に悪化するばかりだ。強風が吹き荒れば、一〇〇メートル進むだけでも一時間以上かかる事もあつた（あくまで感覚だが・・・）。明確な意志や目的があつた訳ではない。歩かなければ・・・生きなければ・・・生きて確認しなければならぬ。その意識だけが、女を歩かせていた。

ズルツ、ズルツ足を引きずりながら、その歩く音だけがひたすら耳に入ってくる。ズルツ、ズルツこのテンポを崩してはならない。少しでも歩く事を辞めたら、もう一步も歩くことは出来ない。一步一歩ずつ歩き続ける。

荒野には、更に冷たく厳しい大気が吹き荒れた。杖の代わりとして枯れ木を持つ手も、当の昔に無い。朦朧とする意識の中で、『歩かなければ、止まるな、足を前に、前に・・・』そう何度呟いた事か。

しかし女に限界が来た。動けない。もう何時間も後一步が踏み出せずにいる。

『あと後一步・・・あと一步・・・あと一步・・・後一步・・・朦朧とする意識の中で、目の前に広がる荒れ地を見続けた。もう、涙も出ない、声すら出ない。見渡す限り、生き物の気配もない。』

『お母さん・・・』

そこで、女の意識は途切れた。

第3章 New Land 4

ドドドドドドッオオ!

地響きを轟かせ、一頭の巨大な生き物が荒れ地を駆け抜けていた。これが獰猛な種類の生き物であることは一目瞭然で、興奮している口元からは止めどなく涎が滴り落ちている。また血走ったその深紅の眼は、どこを見ているのは計り知れない。毛が短く、剥き出しの黒々とした皮膚が、この生き物の獰猛さを否応が無しに際立たせていた。

この世界の獣は、人を襲った事があるか否かの二種類に分けられる。ひと度人間を襲えば、その額に宝玉が浮かび上がり、明確な意思を持ち人を襲う様になるのだ。この獣の額にも、その宝玉が怪しげな赤い光が爛々と湛えていた。

名を「キヴソン」といい、身の丈が人間の三倍はあるつかという生き物である（ギヴソンという名は、人間達が付けた通り名だ）。勿論、人に慣れる生き物ではない。赤い目をギョロギョロさせながら、何もない荒れ地をひたすら駆けていた。

しかしそのキヴソンに跨っているのは人間であり、手綱を悠々と操りながら目的地へ誘導している。随分ガタイが良い男で、背中には自分と同じ身丈程の剣を携えていた。ごついゴーグルでその表情は読み取る事が出来ない。

「フフーン」

乗り心地は決して良い方ではないだろう。しかし、そんな事は感じさせない位、終始安定した走りだ。

この走りは勿論、キヴソンの意志ではない。この獣は、隙あらばと、この憎たらしい人間を振り落とそうとしていたし、屈辱的行為を虐げる人間を、今すぐにでも喰らってやると息巻いていた。しかし、どうやっても自分の願いは敵わない。認めたくないが、自分の

力を遙かに上回っている。

「くん？」

その人間に肩にちょこんと腰掛けていた小動物が、少し鳴いた。毛は長く、少し長めの耳と、大きな目、そしてフサフサの尻尾。この男には似つかわしくない可愛い生き物だ。全身で風を受けながら、正面右の遙か地平線を見ている。大きな目には、荒れた地しか映っていないかと思われた。しかし、更に大きく見開かれた目に映ったものは・・・、

「くんつくつくくく」

止まれと言わんばかりに、この小動物は男に向かって吠えた。しかし男は気付かない。小動物は、一生懸命頬を体で押した。頬に当たる柔らかい毛並みに、驚き男は問うた。

「えええー？ 何ですか！ タロちゃん」

めったに見せない可愛らしい行為に、男のテンションは一気に上がる。

「・・・」

ガブッ！！

「ギャ！ いっ痛っだー！！」

思いつき耳を齧られ、あまりの痛さに思わず手綱を引く。砂埃を立てながら、キヴソンはしぶしぶ従い、走りを止めた。

男は涙目で耳を擦りながら、

「タロ！ 何すんの！ いきなり噛むなって言っただろーが！
いや、噛むなっつての」

野太いでかい声で、タロと呼ばれた小動物を怒鳴った。しかしタロは、男の様子など気にも留めていないかの様に（実際、全く気にしていない）、ある方向に視線を移した。耳を押えながら、タロの視線に合わせた。

「なんだあ？ あらあ？」

枯れた灰色の世界に、薄ぼんやりとした光が見えた。こんな荒野に、

光り輝く光？ 場所は少し離れているようだが、キヴソンを走らせれば一〇分位で着きそうな距離だ。一刻も早く一つ目の海を越えたかったが、

「へへっ。面白そうじゃねーか！」

そう悪戯ぼく笑うと、思いつきキヴソンの脇腹を蹴り上げた。その衝撃で狂ったように、キヴソンは走り出す。

「ん〜どこだ？」

その光は、少しずつ発光を弱め、か細くなり靄のようにしか見えない。この広い荒れ地だ。光が消えたら、まずその場所を見つける事は不可能だ。しかし左肩の小動物には、まだその光がはつきり見えているようだった。一点だけを見つめ、微動だにしない。・・・この世界の生き物にしか分からない何か・・・か？ そう男は感じた。

「お前が頼りだぜ！」

強く手綱を握りしめ、男は叫んだ。タロは小さく「くんっ」と小さく鳴いた。

ガゴン！

男はギヴソンの手綱を地中深く突き刺した。無駄な足掻きをするギヴソンを横目に、目の前の汚いぼろ雑巾に目を移す。

「たぐよ〜」

男がその場所に到着した場所には、光の代わりにぼろ雑巾が打ち捨てられていた。正直こんなにしょぼい結果になろうとは、考えてもみなかった。この世界らしく、冒険の扉が開いているかと思ったのに。

「こらあなんだ？ 布？・・・服う？ ちえ、せっかく来たってんのに、無駄足とはね〜 あ？」

さてと・・・と、踵を返し立ち去ろうとした時、布の切れ間から、人間の掌と思しきものが見えた。

「あゝ人間か？ 何でこんな所に？」

ぼろ雑巾と見間違えう程、肌も血色はなく枝の様だった。男は周りをグルリと見渡すが、仲間らしき人影はおるか、生き物の気配すらない。それもそうだろう。この荒地は果てしなく広く、旅人は敢えて遠回りをしてまで避ける場所だ。

この世界は広い・・・安住の地を持たずにさすらう人間達の中には、死に対する尊厳が薄い人間達も居る。

「あー死んで捨てられたか？・・・しょうがねえ。埋めてやるか」

一旦上げた視線を落とすと、タロがぼろ雑巾の頬らしき所をペロペロと舐めている。その可愛らしい仕草に、

「おい、腹こわすぞ。まったく、何お前、そんな可愛い行為も出来んの？ 知らなかったんですけど？」

そう日頃の恨み節を聞かせながら、ひょいと持ち上げると、

「・・・え？」

微かだが、「ピクツ」と体が動いたのだ。意識はないが、微かに息使いを感じる。その様子を見届け、タロがぴよんと肩に乗った。早く行けと言わんばかりに、グイグイと男の頬を押す。・・・決してじやれている訳ではない。そして、それは男も良く分かっていた。

「え、何？ 連れて行くの？ 何で？」

タロが早く行けと言わんばかりに催促をするが、あからさまに受け入れがたい表情を浮かべ、

「いや、あのホントに嫌なんですけど」

そう訴えてみる。この世界の人間を拾ってどうするのだ。仮に回復したとして、その後の対応に困る。ジリジリと後ずさる男に、痺れをきらしたタロが、大きく口を開けてガブリと耳を噛んだ。

「・・・うぎゃー！！ 痛ってー・・・あのなあ、お前拾うのと訳違うんだって！」

男は深い溜息をついたが、タロの催促に諦めたのかそのボ口を肩に

乗せた。そして、怒りを剥き出しにするギヴソンに踵を返す。

「よっしゃっ！ 帰るか！」

グツと手綱を引き上げて、ギヴソンの背中に飛び乗った。

第3章 New Land - 5

『暖かい・・・』

『甘い・・・？』

女は深い意識の底から、浮き上がるようにスーと目を覚ました。

『ここ・・・どこ・・・』

全く思考回路が働かない。自分の意識で動かせる目だけを、左右上下に移してみる。ふとシンプルな天井の木目が目に映った。

『部屋の・・・中？ 何故、こんな所に・・・』

荒野と打って変わった状況に困惑しながらも、自分が柔らかい布団に包まれている事に気づく。羽毛の様な軽さと温かさに、全身で幸せを噛みしめる（ただの綿の布団だったが、女にとっては至上の幸福だった）。

『布団・・・何て・・・柔らかいの？』

体は鉛の様に重く、起き上がる事すら出来ないが、何とか状況だけは掴みたくて躍起になった。自分が何故ここに居るのか理解出来ないまま、荒野とは比べ物にならない位の安全な世界に、気持ちが焦って仕方がない。

「目え、覚めたか？」

突然、野太い声が左手方向から聞こえてきた。自分以外の存在に（こんな場所に居て何だか）、ビクリと心臓が跳ねる。自身に受けた衝撃で、グラツと目の前が歪んだ。何とか目だけ向けると、

「おらっ、食え。てか、舐めろ」

女の反応など微塵も期待していない物言いで、強引にスプーンが口に押しつけられてきた。

『誰？』

随分と大きな男だ。虚ろな目に飛び込んできたのは、シャツの上からでも分かる鍛えられた筋肉。ゴツゴツとした手、武骨に生えた髭・

・陽に焼けた肌。

「にんげん・・・」

女は虚ろに呟いた。

押しつけられたスプーンから、トロツとした甘い液体が口の中に流れ込む。何日も食物を入れていない胃に、ゆっくりと染み込む優しい甘さ。深い眠りに落ちそうな虚ろな意識が、突然クリアになった。

「お前エングだったんだな。だったらこれは、地球でいう蜂蜜みたいなもんだ。体力を回復する効果がある。食えるだけ、今は食つとけよ」

『蜂蜜か・・・そうだな。この味はそうだ。あれ？ はちみつってなんだっけ？』

懐かしい様な、そんな物は知らない様な・・・頭と心がちぐはぐな感覚に陥る。そんな女の様子を、じっと見ていた男が問うた。

「お前え、名前は？」

『なまえ・・・なまえ・・・？』

初めは名前という単語すら認識出来ずに、女はキョトンと男を見た。何日も声を発していなかったからか、上手く言葉を発する事が出来ない。喉で声が詰まり、ゴホツとむせてしまう。

「ナマエ・・・なまえは・・・」

思い出せない。記憶がシャッフルされてしまったかのように、上手く組み立てられずにいる。何故、ここにいるのだろ。この人は誰？ そもそも、私は何なのだ。思わず片手で額を押さえる。なまえすら思い出せない自分に、混乱してしまう。あれ？ なまえって何だっけ？

こんなこと、今まで一度も体験した事がない・・・ない？ そうなの？ それすらも分からない。

大きな影が目の前を横切った。

バチン！

その時、女の体に衝撃が走った。初めて会った筈の男から、両頬を掌で弾かれたのだ。痛みはない。痛みはないが、ハツとした。男は掌を女の頬に乗せたまま、真剣な眼差しで女に問うた。その声は決して荒くはなく、ただただ真剣だった。

「おいっ！　しつかりしろ。名前だよ！　なーまーえー。お前は誰だ？

いいか！？　ここで忘れたら、一生思い出せなくなんぞ。思い出せ！　俺らにとつては、あの世界から来たって事は絶対に忘れちゃなんねえ。自分のルーツだけは、忘れちゃいけないよ。いいか？　荒野からゆつくり遡るんだ。

何で、一人であんな所に倒れていたんだ？　何で、一人で荒野に居たんだ？」

そこまで言うと、ジツと女に視線を向けた。男の迫力に押される様に、必死に記憶を辿り、そして、一番近くにある記憶を掴み取った。

「なぜ・・・荒野に？　・・・そうだ、もう一步も歩けなかった。そこで、記憶途切れて。そう、ひたすら歩いていたら・・・何日も、枯れた土ばかりの広大な土地を、行けども歩いた。途中、砂嵐に巻き込まれたり、豪雨に降られたり・・・時には、水たまりの水すら飲んだ。その水たまりも直ぐに日上がってしまったけど・・・考えてみたら、あの雨が無かったら私死んでいたかもしれない・・・」

混沌とする意識の中で、止めどない記憶が口から溢れてくる。そんな様子を、男は何も言わず見つめていた。

「そうだ・・・目が覚めたらあの荒野にいたんだ。だって私、空から投げ・・・出され・・・て」

そこまで辿った時、突如女の目から涙が溢れ出した。『何故・・・忘れるなんて・・・』大事な記憶を忘れかけていた事実に驚愕し、そして思い出せた事に安堵の気持ちが溢れる。

『思い出した。何故自分が、この不思議な世界にいるのか？

何故、荒野を彷徨っていたのか、歩き続ける理由は何だったか。何故、全てが受け入れられない事ばかりなのか』

・・・言葉にならなかった。女の頬に涙が一通り流れ落ちた時、ごつい男の掌が両頬をグーと押した。そして豪快に白い歯を見せて、ニカツと笑った。

「んで、あんた名前は？」

この男は何なのだ。女は、涙と荒野を歩いた汚れでくしゃくしゃの顔になりながら、押されてタコのようにになった顔で呟く。

「ハル・・・」

声が続かない。男は名前を聞くと、更に太陽みたいに笑った。コロコロと表情が変わる男だ。人間らしい・・・女はぼんやりと思った。

「そっかー！ ハル。俺はゲン、元だ。んで、こいつは、タロ」

いつの間にか元の肩に乗りながら、ハルの顔を覗き込む小動物を指して言った。タロと呼ばれた小動物は、元の腕を伝いハルの肩まで降りると、涙に濡れた頬をペロペロ舐めてくれた。

『慰めてくれて・・・いるのかな？』

動物の温かな体温を感じるこの瞬間が、奇跡の様だ。頬を包む元の掌の大きく優しい掌が、荒み固まった心をゆつくりと溶かす。

その後、ハルの頬を押し続ける元の手の甲を、思いつきりタロが噛んだ・・・その様子に、ハルは薄く笑う。

この世界で、まだ死なずに生きている。この数日間、願う事すら罪だった感情と情景に、涙が溢れて止まらなかった。

第3章 New Land 6

ハルが元に助けられて、数日が経とうとしていた。宿泊している宿から一步外に出ると、外の日差しの暖かさを全身で受けて、柔らかい土の感触に人知れず感動を覚える。宿からは、エンダと呼ばれる人々の笑い声が響き、何とも平穏な日々。元が言うには、各地にこのような宿が沢山あり、基本エンダは宿を渡り歩きながら生活をするらしい。

「エンダは一箇所に留まれねえからな」

『元の言葉は、どのような意味を持つのだろう・・・』

そう言う元の表情は、読み取れない感情を含んでいた。ハルの体調が万全ではない為、元は込み入った話を極力避けていて、真意は分からない。

「精神的なものも、回復に影響が出ちまうからな」

ハルは体調が良くなると、宿の周りを散策する様になっていた。落ちている体力を何とか改善しようと考えていての事だが、直ぐに疲れが出てしまい、寝込む事も多い。

宿の周辺は木々が切れる場所で、湖には暖かな日差しが降り注いでいる、何とも穏やかな場所だ。宿の周りには、所々に小さい花が咲き、鳥がさえずり、時々魚が水面を跳ねる音が聞こえてくる。

「灰色の世界かと思っていた・・・」

自分が数日前まで置かれていた現状を思えば、この世界の何と美しい事か……。しかし、今のハルには、空も、空気もそして生き物ですら、何もかもが常識では図れない。別世界から来た事を考えれば当然だろう。

そう、まずこの空。強い日差しの太陽と、熱を感じさせない大きな星がいくつも空にあり（空の色が青かった事は救いだった）、その大半は何故か、空の色に透けていた。深く広がる綺麗な青い空な

のに・・・何故、こんなに窮屈な感覚に陥るのだろう。

「これだけは、慣れそうもないな・・・」

宿から少し離れた、見晴らしの良い場所に繋がれている獣・・・ギヴソンに目を向ける。四肢を鎖で繋がれているというのに、暴れているのだろう。獣の周りは、無残にも地表が露わになっていた。元に近寄るなど言われている獣は、先程からジッと自分を伺っている。大人しくしているように見えるが、滝のように流れている涎、奥底に怪しく赤く光る眼を見る限りでは、自分をどう思っているのか、手に取るように分かるのだった。

そもそも、何なのだ。この常識外れの大きさは？ この見て取れる狂暴性は。これ程の生き物、見た事がない。そんな生き物が、こんな住居近くに繋がれて？ 飼われて？ いていいものか？

ハルはもう一度、空を見上げ、そうしてフウと浅い溜息を吐いた。でも、本当に異質なのは自分自身だろう？ と自嘲する。足のつま先、そして手の平、爪の先まで見た。目に映った枯れ木の様な体に、笑いすら出てしまう。荒野を歩き続けたからなのか、この世界に來たばかりの「低スキル者」だからなのか、骨と皮だけの体。いつ折れてもおかしくない位の弱々しさ。

そして、この体自体が自分自身ではない事実。世界の基準がずれているのかもしれないが、身長が二〇cm程縮んだように感じる。身長だけではない。痩せこけてという次元を超えて、日本風の顔が少し彫が深くなっているし、髪の毛も腰程の長さになり、太い黒髪が柔らかい少しシルバーが入った栗色を湛えている。

『全くの別人だ。気持ち悪い・・・。これには、何の意味があるのだろう』

外見が変わるのは、正直本位ではない。こんな異世界に來たとしても、私は私なのだと思いたかった。

棒きれのような手を見ながら、ハルはグッと掌を握り締めた。

その時、

「ちえ、あいつら煩くて寝てらんねえや。エンダになったばかりで、浮かれてやがる。」

「・・・おいつ、あんま無理すんな？ 万全じゃないと疲れるからな。ここは」

元が宿の入口からノソツと出て来て、声を掛けてきた。元が現れた途端、獣が発する殺気が少しばかり小さくなった様に思う。

『あんな獣を従えるなんて、一体どれ位強いのかな・・・』

フツと可笑しくなった。「強い」が基準になるなんて・・・。そんな事を思っていると、元の足元からハルの肩を指してタロが走り寄ってきた。スルルと体を上り、チョコンと肩に乗り、ハルの頬にスリスリと体を摺り寄せてくる。

「タロ」

タロの陽だまりのような匂いに、ハルは目を細めながらも声を押し殺して呟く。

「寝てばかりもいけない。早く体力をつけて・・・早く「始まりの地」に行かなければ」

元に言った訳ではない、自分自身に言ったのだ。この動かない体が、何とも歯がゆい。いつまで経っても回復しない体力に、辟易する。

『こんな場所で、のんびりしている場合じゃないのに・・・！』

目の前の頑固な女に、元は深い溜息を吐いた。何度も何度も、この女に言い聞かせてきた。この世界では、低スキルの人間にとって、体力の低下がどれ程の危険を伴うものなのか。この体にまわりつく膜が、否応なしに体力を削げ、エンダを死に追いやるというのに。 「・・・ま、いいけどね。俺もここではやることねえし・・・ま、もう少し付き合ってやらあ。・・・タロの野郎も、お前に慣れてやがるしな（怒）」

「・・・すまない」

元の言葉に、ハルは本心から謝罪した。元には、本当に感謝している。行き倒れていた自分を助けてくれただけではなく、体力が回復

するまで面倒まで見てくれている。利用しているようで、本当に申し訳ないのだから、今はもう元だけが頼りなのだ。

「早く体力を回復して・・・出て行くから」

元は頭を掻きながら、んな事言ってんじゃねえよ。と呟いた。目線を下に移し、足で地面をガシガシと押し固める。チラリと見た目線の先には、じつと自分を見続けているタロの視線が刺す様に見えた。

「ちつ、恨めしそうに見てんじゃねー。何だよ、俺正しいんだぜ？ 何かあったら困んの自分なのにさ・・・たく、俺は間違った事、言っでなくねえ??」

元は、寂しそうに口を尖らせた。

第3章 New Land - 7

元が深い溜息を吐いた。

「だから・・・無理すんなって・・・」

その日の午後、二人と一匹は森の中に居た。忠告を聞き入れないハルの付き添いで、森の中を散策する羽目になっていた。森は見た目以上に深く、奥に行けば行く程深い緑に覆われていく。

「付き合わせて・・・」

ハルの言葉に、怒ったように元は答える。

「悪いって思ってたんなら、大人しくしていてくれた方がよっぽどいいよ。・・・てかさあ、迷惑や面倒だから言ってるじゃねえから。今さ、無理して長引いたらどうすんの？」

前に言っただけど、俺達エンダの使命は、獣の脅威から民を救う事だ。俺達はそれだけの為に、この世界に存在していると言っても過言じゃねえ。だからさ、獣と戦わずして、死ぬなんてエンダの恥だぜ。っていうか、まだあんたはエンダじゃないけどさ」

右も左も分らないこの世界で、エンダと言われても正直ピンと来ない。増してや、ここに連れて来られた真の目的が、獣を倒しこの世界の民を救う事だったとは。

『倒す・・・って、色んな意味で無理だと思うけど・・・』

もとの世界では、生きる為に得る食料も、見知らぬ誰かが殺生したものだ。甘いと言われれば、甘いのだろう。

『この手で、命を摘むなんて・・・出来るのか？』

ハルは、自分の宿命を受け入れきれない自分の甘さを恥じた。

『止まったら駄目だ。今は進むしかない・・・』

そう何度も自分に言い聞かせて、無理やり前向きになろうと足掻いている。

そんなハルの苦悩を横目で見ながら、元は言葉を更に繋げた。

「俺の話で申し訳ねーけど、俺がここに来たばつかの時に、自分のレベル以上の獣を狙ったんだよ。そりゃ、倒せればかなりのスキルアップが望める。この世界は、獣を倒せば倒す程、自力が上がるからな。」

皆、躍起さ（いやスキルアップの為に獣を倒している訳じゃないが・・・）誰も自分達が死ぬなんて思っっちゃいねえから、無理したんだな。命からがら逃げおおせたが、俺以外は回復出来なくて消えちまった。死ななきゃ大丈夫じゃ、ねえ。体力の限界が来たら、突然消えんだ。

もとの世界に戻ったなんて言う奴らもいるが、そんな都合のいい話なんて信じられねえ。この世界に連れて来られる前に、散々言われたしな。

こんな世界で、何も残せずに消滅するなんて俺は嫌だね。

獣を狩るのが俺らの使命だとしても、もっと目的持つて生きたいじゃん。俺は五つの海を越えた場所にあると言われている、獣が生まれる場所を潰したいんだ。それが出来れば、ここに来た意味もあるってもんだろ？」

ここまで一気に話した元は、少し間を置いてこう言った。

「死んだら元も子もねえ。やりたい事も出来ずに消えてもいいのかよ」

「・・・」

元の言いたい事は良く分かる。少しずつ回復している体力が、少しずつ剥ぎ取られていく。

『この外気が一番のネックだ・・・』

そうハルは思う。この世界の気は、どこまでも澄んでいて、体の細胞一つ一つに酸素が行き渡る・・・そんな感覚を受ける。心地いい、心地いいはずなのに・・・皮膚が、内臓が、髪の毛一本までもこの世界を拒絶している。体を守る皮膚が一枚剥がされた様な、この居心地の悪さが、お前はこの世界の住人ではない事を忘れるな、と言われているようなものだ。

この世界に来て、常に胃もたれと吐き気に苦しめられていた。体調が良い日でも、少し無理をすると、症状が重くなり立つ事すら困難になる。

ハルは、元の言葉を噛みしめた。

『体力の回復が遅れたら、私はこの世界からも消えてしまう・・・。もとの世界に帰れる？』

骸骨を思い出し、自虐的に少し笑った。そうして、

『死ねない。私は、まだ死ねない』

そう拳を握り締める。

『でもこのままじゃ・・・』

そんなハルを見ながら、元は頭をボリボリと掻き、首をゴキゴキと鳴らした。元は今後の事を考えあぐねていたのだ。

『こいつは・・・もたないかもしれないなあ。あまりにも体力が無さ過ぎる。もう少しスキルアップすれば、体力の回復が勝るんだがなあ。』

でもなあ、獣と戦っても絶対勝てねえし』

元は考えに集中するあまり、考えている事が口から零れ落ちていた。脳と口が直結しているかのように、大きな独り言をブツブツと呟いている。

「んー・・・始まりの地に行けば、今よりずっと楽になるだろうが・・・ここからは随分距離があるし、如何せん交通手段があれじゃあ、着くまでにおっ死んじやうし。それにあいつ、すげー獣くせーから、もう臭くてそれだけで死んじやうっていうか。

かと言って、行かないや何も始まらねえし・・・。あーもう！何で、洗礼を受けてねえ奴が、あんな場所で行き倒れていたんだ？」
ハルは蓄積する疲労感を感じつつ、元の言葉に耳を傾けていた。

『いい奴だな』

本心からそう思う。タロと言えば、ハルの肩にちょこんと乗りながら、あまりにも大きな元の独り言に、少し呆れ気味に元を見ている。

「ヴー・・・！ もう少し体力が残っていたら、話は違うんだが・
・」

元は頭をガシガシと掻いた。どうやってしても、ハルが始まりの地に足を踏み入れる事が出来る気がしないのだ。

「でも、自分の世界を捨ててこの世界に来たってんのに・・・。
エンダにも成れずに死ぬなんて、あんまりだよなあ。何とかしてやりてえんだけど」

どうにも出来ない状況に、元は思わず天を仰いだ。ハルは元の独り言を、ジッと噛みしめていた。

第3章 New Land - 8

・・・疲れた。ハルは、木の根元にペタンと座り込んで、一步も動けずにいた。森の半分まで行き、宿に引き返している途中だった。肩で息をするハルを見かねて、元が近くの泉まで湧水を汲みに行ったのだ。

「何やっていろの？ 私」

ギリリツと拳を握り締め、力無く地面を叩き付けた。これでは本末転倒ではないか……。元の忠告も聞かずに自分勝手に動き回って、動けなくなったら助けてもらって。親切に甘えて……。最悪だ……。自己嫌悪で死にそうになる。分かっている、分かっているのに、どうすればいいのか分からない。ただ、体力を付けたいだけなのに。

ハルは溜息交じりに、タロの姿を追って木の上を見た。木の枝では、ハルの傍に残ったタロが、ちょこちょこ動き回っている。タロの無邪気な様子を見ると、心が少し安らぐような気持ちになりフツと微笑んだ。しかしその瞬間、

「あつ！」

タロの直ぐ背後に大きな影が写った。ゆっくりと大木に巻きつきながら、タロの背後から迫ってきている。この位置からは全貌が掴めない程、大きい……。ハルの三倍以上あるうかという大蛇の姿だった。「タロ！ 危ない！ 逃げて！！」

ハルの声と同時に、大蛇はタロを目掛けて襲ってきた。ハルの声で、タロは間一髪別の枝に飛び移り難を逃れた。つい先程まで飛び跳ねていた場所は、大蛇の攻撃で無残にも、大きくえぐられている。

「タロッ！」

しかし飛び移った先の枝は、タロの体重を支えきれていない。そのままバランスを崩し、枝にしがみ付く体勢に、

「くうー……。ん」

タロが、か細く鳴いた。その姿に大蛇は体を大きく揺らし、タイミングを図りながら飛びかからんばかりだ。

「タロから離れて！」

ハルは咄嗟に、歩行用の補助として渡されていたメイスを、大蛇目掛けて投げ付けた。こんな杖がタロの助けになるとは思わなかったが、

『何とか気を逸らせないと！』

その一心であった。メイスが手を離れた瞬間、

「えっ？」

ハルの僅かな体力がゴソツともぎ取られ、強烈な脱力感に襲われる。

「た・タロ・・・」

闇雲に投げられたメイスは、一気に大蛇に向かって加速した。ドスッ！

メイスがおびただしい何かを纏って、明確な意志を持つかの様に大蛇の額に突き刺さった。大蛇は体を傾倒させたかと思うと、地響きと共に落下した。落下の衝撃で落ち葉が巻き上がり宙に舞う。ハルが倒れこんだのも、ほぼ同時だった。

「馬鹿野郎！！」

次にハルが目が覚めた時には、何故か宿のベッドの中だった。朦朧とする意識の中で、元と目が合った瞬間、間髪入れずに怒鳴られたのだ。

もう、どこにも力が入らず、瞼すら開けてられない。

「今はゆっくり休むんだ。動くなよ、辛うじて残っている体力まで無くなっちまう」

元の声が遠い所から聞こえてくる。メイスを投げ付けた時からの記憶が途切れ、何故無事だったのか不思議でならないただただ重力が何倍も負荷され、深い闇に体が沈んでいく様だ。

ハルが再度深い眠りに落ちかけた時、ポタポタと手の甲に水滴が落ちた。何とか視線を向けると、タロがポロポロと涙を落している。

「タ・・・」

無事で良かった・・・思わず動かない手を上げようとした時、

「動くんじゃないやねってんだろ！死にてえのか！！」

元の怒涛が響く。

「寝ろっ！　今は何も考えずに寝るんだ！」

その声に導かれる様に、ハルはまた眠りという深い底に落ちて行った。

第3章 New Land - 9

「いよつしゃー、この峠を越えたら始まりの地だ！！ 一気に越えつぞー！！」

ドドドオドドオドドオオオツ

狂ったように駆けるキヴソンを操りながら、元は野太い声で叫んだ。ハルを左肩に乗せ、右手でキヴソンを扱う姿は、正に戦士そのもので一種の風格すら感じさせる。

「大丈夫か？ しんどかったら、休むぞ！？ 辛かったら後ろに移れよな」

ギヴソンを走らせ半日が経過しているが、元とギヴソンに疲労の色は全く見えない。

「・・・かまわん。このまま走り続けてくれ。元が休みたかったら休めばいい・・・」

力の限り駆け抜ける、キヴソンの乗り心地は決して良くない。しかし弱音など吐いていられない。ようやく始まりの地に立てるのだから。元からエンダが始まりの地を踏まなければならない理由を聞いてから、居ても立ってもいられなくなった。

『あの緑の生き物が、私を連れて行こうとしていた場所・・・か』
「ガハハ！ んじゃーこのまま一気に行くぜ！ 天気が良い内に、距離を稼ぎたいからなあ！」

元は、そう叫びながら、ガッツとキヴソンの脇腹を勢いよく蹴り上げた。キヴソンは狂ったように雄叫びを上げ、更に走りを加速させる。

元は手綱を握り締め、視線を遠くに飛ばした。進むべき方向を確認し、後は手綱を操るだけだ。峠は深く険しいが、ギヴソンの足であれば今日中に越える事が出来るだろう。方向が固まると、元はチラリと肩の上のハルを見た。ハルは長い髪を風になびかせながら、遙か先をジッと見続けている。表情からは何を考えているのか、汲

み取る事は出来ない。最近は前にも増して、感情を表に出さなくなっていた。

『しかし・・・何が起きたかと思っただぜ』

あの時、ハルの叫び声で駆け付けてみれば、ハルが大蛇を前にして倒れていた。

「くそ！！！！ 遅かったか！」

慌てて剣を抜いて駆け寄れば、大蛇は既に絶命していて、その体は尻尾から消え始めていた。長い胴体に隠れて見えなかったが、額にメイスが突き刺さっている。どう見ても致命傷は、この額のメイスしか考えられない。元は訳が分からないまま、すぐさまハルの首元に手を添えて脈を確かめた。

「極僅かだが・・・脈はある」

元は、そのままゆっくりとハルを抱え上げた。

くうくん・・・

「タ、タロ！！（この俺がタロの安否を忘れるなんて）」

枝にしがみ付いたままのタロの姿と、えぐられた大木を見て、元は眉間に皺を寄せた。

恐らくタロを助ける為に、大蛇にメイスを投げつけたのだろう。しかしあんな細い棒だ。ただ闇雲に投げただけでは、当然に仕留める事は出来ない。元はメイスに手を掛け、グイッと引き抜いた。元は戦士だ。当然に魔力はなく感じる事は不可能だが、このメイスは名手の作で魔力を増大させる効力があるらしい。

「こいつの消耗を考えると、魔力を使ってメイスを武器にした・・・、と考えるのが妥当か？」

しかし、と元は思う。

『仮に魔力が使えたとして、あの蛇は低スキル者が倒せるレベルじゃねえ。しかもこいつはエンダじゃねえんだぞ？ 何なんだ、こいつは。』

・・・ま、獣を倒した事で、旅が出来る程度までスキルも上がった

しな。結果オーライか』

思考が行き止まり、ジロリとハルを見た。正確には、ハルの肩に乗っているタロを見た。あの日以来、片時もハルの傍を離れようとしない。何とも安心しきった顔で、ハルと同じ先を見ている。

時々、嬉しそうに擦り寄る姿を見ると、無性に胸の奥がムズムズするのだ。

『……もしもーし。最初に獣から襲われていたお前を助けたの、俺なんですけど？』

かつてない喪失感に胸がざわつく。

『もしかして、もしかして……このままハルについて行っちゃうんじゃ？』

ハルはエンダになったとしても、俺と一緒に旅が出来るレベルじゃねえ。始まりの地まで送ったら、そこで別れる……その時タロはどうすんの？』

今までタロと過ごしてきた思い出が、走馬灯のように浮かんでは消えていく。(いつも噛まれたり、引っ搔かれたりして、ろくな思い出がないが) タロとの別れを想像するだけで、元の目頭がジインと熱くなった。

『タロ……』

元は思わず溢れる涙を、誰にも気づかれないようにそっと拭った。

第3章 New Land - 10

ハルは深い溜息を吐いた。

「いやいや、溜息吐いたって仕方無いからさ。　たく、疲れたんならそう言えっつーの！」

元達は、始まりの地に程近い町の宿に居た。またもやハルはベッドの中だったし、元は相変わらずブツブツ文句を言っている。

予定では、とつくに始まりの地に到着している筈だった・・・思うと、ハルの心は落ち着かず、気持ちだけが逸って仕方がない。「肝が冷えたぜ」

道中始まり地を目前にして、ハルが元の肩から後ろに倒れ込んだのだ。間一髪で元が体を支えたが、ギヴソンの体から振り落される一歩手前で、最後の渓谷に差し掛かった場所での出来事だった。

宿のベッドに寝かされたハルは、すぐ尽きる体力にうんざりしている様子で、真上の天井を見据えながら元に問う。

「あとどれ位で、始まりの地に着く？」

ハルの問いに「今は休む時だからな」そう言いながら、元は乱雑にブーツを脱ぎ捨てた。

「あー・・・この町には以前立ち寄った事があるから・・・あの当方で四日位か。めっちゃ弱かったからなあ、あんな距離に四日って・・・ハハハ。」

今回はギヴソンもいるし、本当に目前だよ。だからあんま焦るなっ
て」

当時の事を思い出し「くはは」と笑った。自分よりも小さい獣ですら、命からがら逃げ帰った事もある。それが今やギヴソンのクラスを従えるまでになったのだ。感慨深いものを感じる。

「あんなに弱くて、よく生き延びられたもんだよなあ。って言うか、ここまで強くなれるもんなのかねえ。ゲームみたいに、戦えば

戦うほど強くなるからさ。こう見えても俺、ちったー名の知れた戦士なんだぜ？ここら辺に来るとき、昔を思い出すよ。あんなギリギリのラインでよく死なずにきたもんだ」

元は昔を懐かしみ、目を細めた。宿が用意したお茶に口を付け、フウと溜息を吐く。宿の窓から、太陽が沈むオレンジ色の光が優しく差し込んで眩しい。

「当時の俺は、弱いながらに強くなりたい一心でさ・・・、」
「・・・」

「あの・・・聞いてる？」

全く反応が無いハルに目を向けると、寝息を立てて寝入っていた。

最近無理せず寝てくれるのは、確かに有り難かったが、

「あつそ・・・えっと、風呂入ろうっと」

軽い溜息を吐きながら、そっと眩いた。

翌日は眩い位の快晴で、気持ちの良い朝だった。

「この辺りは、気候も良くて低レベル者にとっては、生きやすい場所さ」

宿の窓を開きながら、太陽の光に目を細め、元がハルに言う。

「そうか、生きやすい場所か・・・」

そう元の言葉を復唱する。少し動けるようになったハルは、いつもの如く町に足を向けた。この世界が異世界で、民は獣に怯え暮らす日々を強いられるとはいえ、人の営みは自分達の世界と全く変わらない。

「あのな」

少し諦めが入りながらも、元は根気よくハルを戒める。

「昨日ゆっくり休んだから調子が良いんだ。そもそも町に出たくなかったら、宿に居ればよいだろう」

空気のように言い放つハルに、

「うわ、何その言い方。お前がやたらめったら倒れっから心配してやってんのに。大体、何が調子が良いって？ 嘘つくなっつもの！

！ もう、知らんぞ！ ホントに知らんぞ！ 倒れても、面倒見きれんからな！」

「今日は調子が良い」

「って言いながら、お前すくぐ倒れんじゃん」

そんな取り留めない会話を繰り返しながら（主にしゃべっているのは元だが）、二人と一匹は町の中央へと歩みを進めた。

ギヴソンは、町からずっと離れた場所に嚴重に繋がれている。この町には、ギヴソンレベルを扱える施設が無く、苦肉の策として、人が踏み入らない沼地に置いてきたのだ。戻った時のギヴソンの不機嫌さを思うと、元の気はドツと重くなるのだ。

『機嫌が悪いーと、あいつモロ走りに出るからなあ。食料を買って行って機嫌取らなきゃな』

元はゲンナリしながら、沼で暴れているだろうギヴソンを思い返す。「きつと全身泥だらけだ。体を洗う水も持っていこう・・・」等と、ブツブツ呟いている。

中央では、賑やかな市場が催されており、この世界の人々が大勢行き来していた。至る所に店が出ていて、荒野と一軒宿が世界の全てだったハルは、町の活気に内心驚く。中央から少し離れた場所にベンチを見つけ、元はハルを座らせた。

「飲み物買ってくるから」

そう言つて、元は市場の中に消えて行つた。

「面倒見が良い男だ・・・」

人ごみに消えていく元を見ながら、タロに向かってそう呟いた。タロはいかにも興味がなさそうに、クハーと大きな欠伸を一つして、ハルの手の中で丸くなっている。自分を見つけてくれたタロや、始まりの地に送ってくれる元を思うと、この世界で得た奇跡に、感謝してもしきれない。

「ありがたいな・・・」

元と離れて随分の時間が経つが、一向に帰ってくる気配がない。探しに行くのも、この人ごみだ。行き違いになると、後々（元が）面倒くさいなので、動かず待つことにした。

ハルが目を閉じると、町の雑踏が音楽のように聞こえてくる。異国の町は、こんな感じなのだろうか。人々の声すら、流れる川のように留まる事を知らず、ハルを通り過ぎて行く。

心地よい雑踏の音の中、ウトウトとハルが仕掛けた時・・・市場から、どよめきに似た歓声が上がった。集まった人々の輪の中心に目を向けると、見覚えがある大きな男が抜け出した。人々の羨望の眼差しを受けながら、元がこちらに歩いてくる。元は、ドカツとハルの隣に腰掛けると、綺麗な瓶に入った飲み物を渡した。

「いやゝすまん。待たせたな。実は、婆さんが物盗りにあつて困っていたから、犯人探しをする羽目になっちまつて。

掴まえたは良いけど、それが以前、ここで捕まえた奴でさ。こいつも懲りないなと思っていたら、何と物盗りにあつていた婆さんも同じ人でさ。全く！狙われているよ、ありゃゝ」

そう一気に話し、グビリとジュースを飲み干した。元から手渡されたジュースを口に運ぶと、果汁の程良い酸味と甘みに体が癒されていく。

「やつぱ平和な町だよなあ・・・。一つ目の海を越えたらこんなもんじゃねえから。・・・何だか、平和すぎて気が緩むよ。ほら、見てよこれ、婆さんから貰った。いらねえって言ったんだけどさ、今更ながらに、腰当て。ハハハ」

笑う元の言葉を、ハルは異国の言葉のように聞いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274x/>

エンダ

2011年11月18日04時12分発行